

東木津遺跡調査報告

市道清水町三丁目西藤平蔵線拡幅工事に伴う平成18年度の調査 ---

2007年3月

高岡市教育委員会

序

この度報告いたしますのは、平成18年度に市道清水町三丁目西藤平蔵線の道路拡幅に伴い実施した東木津遺跡での調査の成果です。

「東木津遺跡」は、高岡市街地の南西郊、木津地区一帯にあります。当地区は庄川が形成した扇状地の末端にあたる地域です。周辺には、下佐野遺跡や泉ヶ丘遺跡、木津神社遺跡などの数々の遺跡が存在しています。

これまで当遺跡では、平成10年度の高岡市街地の郊外を南北に走る「都市計画道路下伏間江福川線」の築造にかかる発掘調査の他、数々の調査を実施しております。

これらの調査により、奈良平安時代を中心とした、官衙的な遺構・遺物が確認されました。多くの掘立柱建物址が存在したことを見たことをはじめ、木簡・墨書き器などの文字資料や、祭祀具などの木製品を含む多彩な遺物が出土しております。この時期における興味深い内容を持つ遺跡であります。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂きました、関係各位、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

高岡市教育委員会

教育長 村井 和

例　言

1. 本書は、交通安全施設整備事業での道路拡幅工事に伴う、東木津遺跡発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、高岡市建設部道路建設課から委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市木津である。
4. 現地調査は平成18年9月1日～11月5日に実施した。
5. 調査関係者は次の通りである。
〔高岡市教育委員会文化財課〕
文化財課長：荒島千恵子
〔埋蔵文化財担当〕
主幹：本林弘吉
副主幹：山口辰一
主任：荒井　隆
〔有限会社毛野考古学研究所〕
所長：長井正次
調査員：常深　尚
調査員：小出拓磨
6. 当調査は、山口、荒井、常深、小出が担当した。
7. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示、御援助を得た。
(順不同・敬称略)
江藤敦、岡田一広、岡本淳一郎、川崎晃、河内公夫、澤田雅志、塙原二郎、樋田泰之
宮監満、邑本順亮
8. 出土資料の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果について報告文を得た。
9. 本書の執筆分担は以下の通りである。
第1章第1節・第2節と第3章第1節を山口が担当し、これ以外は常深が担当した。ただし、第3章第3節、第4節はパリノ・サーヴェイ株式会社から頂いた報告文に常深が加除筆した。

凡　例

1. 本書で示す方位は、座標北である。水平基準は海拔標高(m)である。

2. 本書における遺構記号は次の通りである。

S A - 柱址、S B - 捕立柱建物址、S D - 溝、S I - 壁穴建物址

S K - 土坑、S P - ピット

3. 図面中のスクリートーンは以下のことを表す。

遺構	炭化層	木屑層・敷物	焼土層・柱痕	Ⅲ層	Ⅳ層
遺物	赤彩	炭化範囲	漆		

調査参加者名簿

- 発掘　安藤誠吾、石田敏行、池田慎玄、大橋欣次、桶谷潤、河原康弘、小板達朗、小林央
澤井昭夫、沢田和明、清水不二雄、新堂秀次、高岡誠一、高鶴輝雄、竹内喜三
宮田幸吉、中山賢富、畠山行男、馬道弘一、村上裕也、山崎一男、山城一夫、山田誠見
- 整理　安藤誠吾、桶谷潤、釜谷香織、上坂哲也、小島あゆみ、小島智子、小林央、菅谷万須美
竹部光希、長森久代、増川吏英子、松本真由美、宮野美重子

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査地区	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の概要	2
第2章 遺 構	3
第1節 概要	3
第2節 坑穴建物址	3
第3節 捜立柱建物址	6
第4節 横址	7
第5節 土坑	7
第6節 溝	7
第3章 遺 物	8
第1節 土器類	8
第2節 木製品	8
第3節 動物遺体	12
第4節 種実遺体	13
第4章 結 語	16
第1節 捜立柱建物址 S B01	16
第2節 坑穴建物址 S I 01	16
第3節 まとめ	18

図面目次

図面01～図面17 遺構実測図

図面18～図面28 遺物実測図

図版目次

図版01～図版08 遺構写真

図版09～図版12 遺物写真

挿図目次

第1図	遺跡位置図〔1〕(1/5万)	1
第2図	遺跡位置図〔2〕(1/5,000)	1
第3図	S I01調査風景	2
第4図	S I01キカラスウリ種子出土状態	2
第5図	S I01昆虫遺体出土状態	2
第6図	調査地区全体図(1/500)	3
第7図	S I01第1面平面図(1/80)	4
第8図	S I01第2面平面図(1/80)	5
第9図	S I01第3面平面図(1/80)	5
第10図	S B01周辺遺構変遷図(1/200)	6
第11図	S I01・S K01出土土器集成図(1/6)	9
第12図	S I01出土木製品集成図(1/6)	10
第13図	縄文出土状態	12
第14図	S I01第2面出土動物遺体	14
第15図	S I01第1面出土種火遺体	14
第16図	東木津遺跡、板状木製品法量分布図	17
第17図	畜牛製作工程推定図(1/6)	17

挿表目次

第1表	検出分類群一覧	12
第2表	S I01種実同定結果	14

別表目次

別表	土器類観察表	20～22
----	--------	-------

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

東木津遺跡は、高岡市街地の南西郊外に位置する奈良～平安時代を中心とする遺跡である。集落址であるが、官衙的な遺構・遺物もあり、莊園や行政関連施設との関連が指摘されている遺跡である。

当遺跡が所在する一帯は、東側を北流する千保川と西側を北流する祖父川とに挟まれた佐野台地と呼ばれる微高地で、標高は11～12mを計る。

東木津遺跡は、東西約1,000m、南北約350mの抜がりをもち、南東側は下佐野遺跡へ続き、北西側は木津神社遺跡へ続く。西側には、JR北陸本線が走る低地部を挟んで、石塚遺跡が所在する。南西側は泉ヶ丘団地の向こうに石名瀬A遺跡が拡がっている。



第1図 遺跡位置図〔1〕(1/5万)

第2節 調査地区

今回の調査地区は、泉ヶ丘団地の北側、「木津（南）」交差点付近である。東南東～西北西方向に走る市道六家佐野線と北北東～南南西方向に走る市道清水町三丁目西藤平岸線との交わる地点がこの木津（南）交差点である。

高岡市建設部道路建設課により、交通安全施設整備事業として道路の拡幅工事が実施されることになり、埋蔵文化財の発掘調査を行うことになった。これまでの調査により付近の埋蔵文化財包蔵地の状況が把握されていたので、試掘調査は省略して、直ちに本発掘調査を実施した。

調査地区は、交差点の北北東側と西北西側の2箇所である。前者を第1調査地区、後者を第2調査地区とした。道路の拡幅部分であり、いずれも細長い調査地区である。



第2図 遺跡位置図〔2〕(1/5,000)

第3節 調査の経過

調査は平成18年9月1日から実施した。表土除去後、遺構の多く検出された第1調査地区から作業を開始した。調査の進行とともに、第1調査地区的堅穴建物址S I 01から多量の土器と木製品が出土し、木製品の工房址であることが明らかとなってきた。堅穴内の溝状土坑やカマド状施設の土を採取し、後日洗浄したところ、多くの種実や動物の骨、昆虫の羽などが検出された。その後、溝や掘立柱建物址へと調査は進み、10月に第2調査地区的作業にも着手した。10月末に蓮階の空報を実施し、11月5日に調査を終了した。

第4節 調査の概要

調査面積

335m²（第1調査地区203m²、第2調査地区132m²）

基本層序

第I層：表土（耕作土）、土器片を多く含む

第II層：灰褐色砂質土（旧耕作土）

第II'層：灰褐色砂質土、Ⅲ層を多く含む、鉄分沈着

第III層：黄褐色砂質土、遺構確認面、層厚約30cm

第IV層：灰白色～青灰色粘質土

検出遺構

検出遺構は次の通りで、奈良～平安時代前期を中心である。

堅穴建物址1軒（S I 01）

掘立柱建物址1棟（S B 01）

櫛址2条（S A 01・02）

土坑9基（S K 01～09）

溝17条（S D 01～17）

ピット多数（S P 01他）

出土遺物

土器類：土師器（杯・高杯・皿・壺・鍋）

須恵器（杯・杯蓋・壺・壺）

木製品：曲物容器、簪、端部炭化棒状品、柱材、柵物、

未製品（直方体原木、板状素材、板状加工木、

棒状加工木）

土製品：輪羽口、スサ入り粘土塊

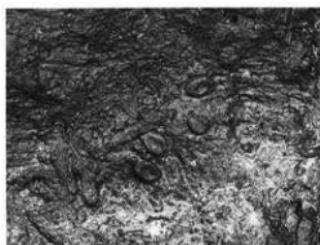
その他：骨（獸・魚）

種子

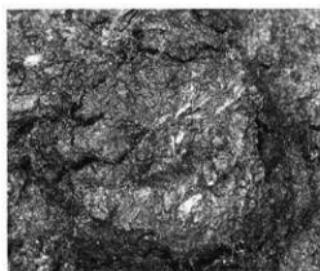
昆虫



第3図 S I 01調査風景



第4図 S I 01キカラスウリ種子出土状態



第5図 S I 01昆虫遺体出土状態

第2章 遺構

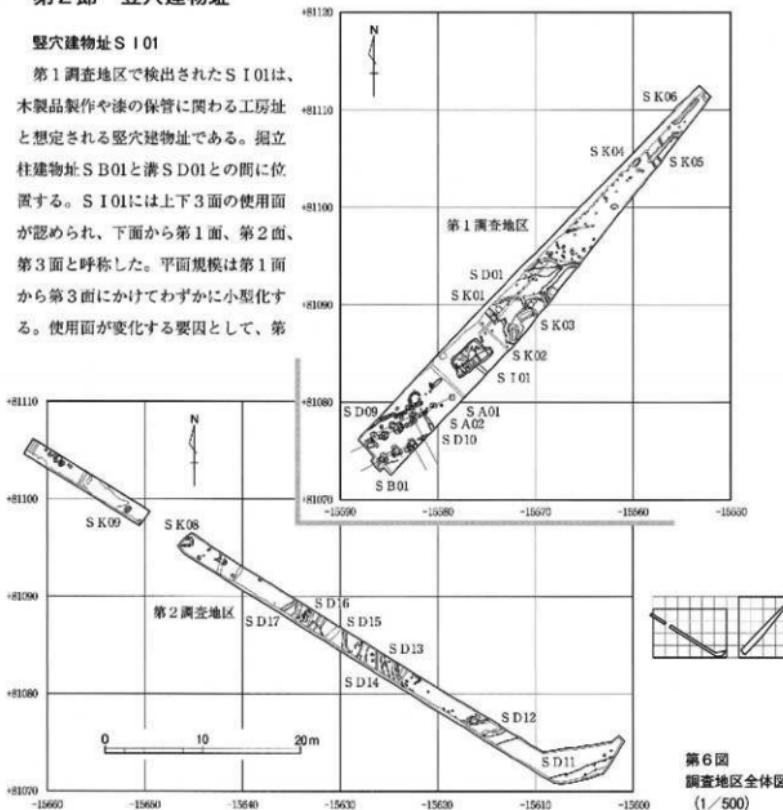
第1節 概要

第1・2調査地区において、集落の北を限る自然流路とみられる溝S D01、S D11が検出された。竪穴建物址や掘立柱建物址など、古代の主な遺構は自然流路の南側に展開し、北側には土坑やピットが散在する。第2調査地区では99'セーブオン地区に連なる複数の溝が検出された。S D16は近世の溝である。第1調査地区北西壁に沿って並ぶピットは現代のハサ穴である。

第2節 竪穴建物址

竪穴建物址 S I 01

第1調査地区で検出されたS I 01は、木製品製作や漆の保管に関わる工房址と想定される竪穴建物址である。掘立柱建物址S B01と溝S D01との間に位置する。S I 01には上下3面の使用面が認められ、下面から第1面、第2面、第3面と呼称した。平面規模は第1面から第3面にかけてわずかに小型化する。使用面が変化する要因として、第



第6図
調査地区全体図
(1/500)

1面から第2面へは溝状土坑の埋没、第2面から第3面へは上屋の火災が考えられる。

[第1面]

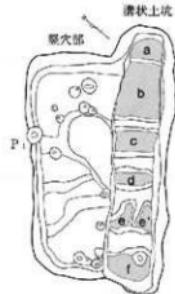
S I 01の第1面は、3.72m×2.45mの長方形の竪穴状を呈し、その南東壁沿いに、幅1.0m、長さ4.4mの溝状土坑を有する。竪穴部の深さは概ね25cmだが、床の中央部には高さ8cmの高まり及びその西に接する深さ5cmの窪みが認められる。溝状土坑の長軸方位はN-54°-Eを示し、竪穴部北西壁より6°東へ偏する。溝状土坑の底面には土坑短軸に平行する段差1状と畦状の高まり4条が検出され、これにより6個の区画が作られる（a区～f区、第7図）。a-b区を区切る高低差6cmの段差は、竪穴部北東壁の延長線上に位置することや、a区のみ木屑層が欠落することから、当初は溝状土坑の北東隅部であったのが、のちにa区が張り出す形状へと変更された痕跡と推測される。f区上部の不整形な張り出しが壁の崩落などに起因するとみられ、このためf区の南側壁面下部には板材による壁面の補強が認められる。この板材は幅約20cm、残存長10cmの板目材で、壁面に貼りつくように多角形状に並ぶ（図面06）。Ⅲ層の崩落を防ぐためには、本来40cm以上の長さが必要である。b-f区を区切る4条の畦のうちb-c-d区間の畦は幅22cm～36cm、高さ3cmと脆弱であるのにに対し、d-e-f区間の畦は幅32cm～48cm、高さ9cmと明瞭である。e区は小畦によつてさらに二分される（e、e'）。これらの畦は地山掘り残しであるうえに、砂質土（Ⅲ層）を掘り抜いて粘質土（Ⅳ層）まで達していることから、各区画ごとの貯水を意図した可能性がある。また底面標高はb区が最も低く、c区からf区に向けて高くなり、b-f区間で15cmの高低差がある。各区画の長さはb区（90cm）やd区（20cm）にみられるように長短があり、竪穴内で製作された木製品の大きさや工程に応じた区画利用が想定される。竪穴部の床面には13基のピットがあり、深さは15cm以下である。溝状土坑d-f区に沿って3基が並ぶ以外に規則的な配置は認められない。深さ37cmのP点は、覆土の類似から第2面段階に属する可能性が高い。

溝状土坑底面からは、b-d区を中心に板状加工木が出土している。b区からは出土木製品最長の65cmのものが、c区では43cm以下、d区では28cm以下というように、区画の大きさと出土木製品の長さに関連性が窺われる。f区からは表皮の残る棒状原木や漆の付着した曲物底板（図面23-2007）が出土した。これらの木製品の上には、b区の南半からf区にかけて木屑層が検出され、とくにe（e'）区とf区では11cmと厚く堆積し、畦を隠すほどである。木屑は、板状材ないし棒状材から切断あるいは剥がされたもの、表皮の残る棒状原木、削屑やチップ状の木片などからなる。この他、板状ないし棒状の未成品がc区とf区を中心にもとまつて出土している。またf区の木屑層のみ炭化物と焼土を含む。木屑層中には植物の種子が多量に含まれるが、表面の摩耗したモソ核の存在が特筆される。

木屑層の上にはⅢ層の二次的な堆積土があり、この層にはb区を中心に板状素材及び板状加工木が含まれ、新たにa区でも出土が認められる。しかし木屑が検出されないため、比較的短期間の埋没が考えられる。これに関連して、溝状土坑南東壁の上塗ラインが乱れているのは、壁上部（Ⅲ層）の崩落があったことを示し、この崩落土により溝状土坑が埋没したことが窺われる。なお第1面における土器の出土はごく少ない。

[第2面]

S I 01第2面の構造的特徴は、第1面で崩落した壁の補修と床面の敷物、カマド状施設、貯蔵穴状土坑の存在である。平面規模は3.5m×2.2m、深さは24cmを計る。第1面の溝状土坑部分は覆土の沈下により14cm



第7図 S I 01第1面
平面図 (1/80)

ほどの窪みとして検出されているが、本来は平坦であったと推測される。

壁の補修はIV層を主体とする粘質土の貼付によって行われ、とくにカマド状施設の周辺で厚い貼壁を施す。床面には蔓状の植物を束ねたものと思われる散物（一部に繊物含む、第13図）が複数重なって検出され、南東壁の一部や南隅の貯蔵穴状土坑内でもみられた。南隅の土坑は70cm×56cmの隅丸長方形を呈し、深さ17cmを計る。竪穴の東隅に位置するカマド状施設は第1面溝状土坑の張り出し部（a区）を利用している。周辺に散乱する焼土塊・粘土塊が天井部の構築材か。底面には燃焼部と思われる8cmほどの窪みに炭化物が検出された。炭化物には切断面を有する削屑や板状材が含まれ、第1面の木屑層に類似する。さらに第2面の床面からは木屑が検出されていないことから、この炭化物は木製品の製作で生じる木屑などを焼却した産物と類推される。燃焼部手前には長さ17cmの角柱状の砂岩が出土し、全面の被熱状況からカマド状施設の支脚石と考えられる。砂岩の周辺からは焼けた動物骨片がまとまって出土している。

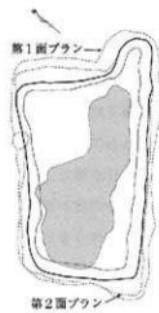
第2面では土器の出土が顕著で、須恵器杯21個体、杯蓋3個体、土師器壺2個体を数える。貯蔵穴状土坑の西には、器形・技法・胎土の共通する須恵器杯の一群（図面19-1034～1039）がある。北隅では須恵器杯蓋と曲物漆容器の蓋紙の可能性のある径14cmの円形を呈する木質遺物が並んで出土した。南東壁中央では須恵器杯（図面19-1016）に上師器壺下半（図面18-1008）が重なって出土したが、この壺下半及び小型壺（図面18-1006）は古墳時代の土器を容器として転用した可能性が高い。木製遺物は板状・棒状の素材片が出土するが、加工木は第1面より大幅に減少する。4点の曲物容器の底板は、漆の付着や補修孔が認められ、未製品ではなく完成品が遺棄されたと考えられる。また縫羽口がわずかに出土している。第2面は最終的にはカマド状施設が壊され、焼土塊が北隅の窪んだ床面を埋めるように堆積している。その後に上屋の火災のためか、厚さ10cmの炭化物層に覆われる。炭化物層中からは土師器壺片、ヘラ記号のある須恵器杯、挽物皿の小片が出土した。

[第3面]

第2面炭化物層の上からは、若干の間層を挟んで第2面床面に類似した散物が検出され、第3面と判断した。第2面炭化物層は吸湿のため故意に残された可能性がある。平面規模は3.3m×2.1m、深さは16cmを計る。第1面溝状土坑や第2面貯蔵穴状土坑の影響で南東壁沿いに窪みが生じている。第2面で構築されたカマド状施設は、内壁と底面を再度IV層主体の粘土により補強している。粘土中には須恵器壺の口頭部（図面22-1115）や須恵器杯蓋（図面22-1096）が芯材として含まれる。壺（図面22-1115）と接合する胴部片数点が床面から出土し、カマド状施設廃棄の際に散乱したとみられる。燃焼部には炭化物の堆積が2層認められ、最終的に多量の焼土塊によって埋没する。竪穴北隅部で曲物漆容器の蓋紙の可能性のある径17cmの円形を呈する木質遺物が出土した他、少量の木片とわずかに縫羽口がみられる。土器は須恵器杯21個体、須恵器杯蓋8個体、土師器壺2個体を数える。この他、第3面覆土中からも多量の土器片が出土し、底部糸切り痕のある須恵器杯、赤彩の上師器皿、漆の付着した須恵器片などが認められる。竪穴部やカマド状施設の土層によれば、これらの土器は第4面に相当する遺物である可能性が指摘される。



第8図 S 101第2面
平面図 (1/80)



第9図 S 101第3面
平面図 (1/80)

第3節 堀立柱建物址

第1調査地区南部で堀立柱建物址の一部を検出した（SB01）。大型柱穴列の外周にやや小振りの柱穴列を配し、さらにその外側に溝を廻らせる構造である。SB01は建て替えがあり、古段階をSB01(A)、新段階をSB01(B)とした。

堀立柱建物址 SB01 (A)

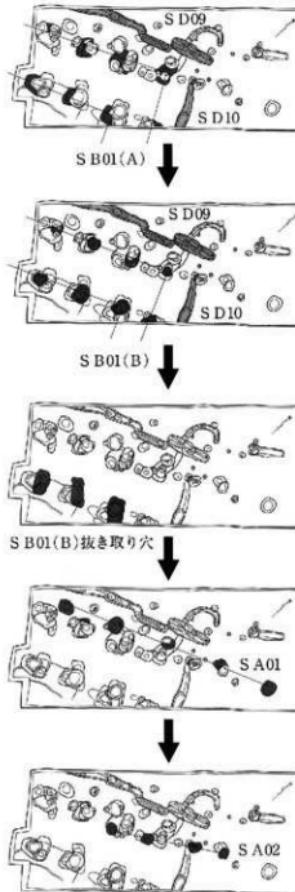
建て替え前のSB01である。身舎柱穴3基とその外周を開む柱穴5基を検出した。身舎の規模は2間×1間以上、総柱・側柱の区別は不明である。全柱穴で柱痕が認められないため、柱はSB01(B)への建て替え時に抜き取られたと推測される。柱穴の掘方は70~90cm四方の隅丸方形を基調とし、深さは身舎柱穴で75cm以下、外周の柱穴で26~38cmを計る。柱間距離は身舎柱穴間で1.8~1.9m、身舎柱穴と外周の柱穴間で2.1~2.4mである。身舎柱穴列の方針はN-66°-Eを示す。

堀立柱建物址 SB01 (B)

建て替え後のSB01(B)はSB01(A)から北東方向へ約30cmずれた位置にある。建物の規模や構造はSB01(A)と同様である。身舎柱穴3基は柱痕が認められず、柱の抜き取り穴と推測される長軸1.0~1.2m、短軸0.5~0.6mの隅丸長方形土坑に切られている。最も東側の身舎柱穴の下層には、斜めに切断された柱材（図面28-2043）が遺存しており、SB01(B)が最終的に解体されたことを窺わせる。2043は推定径40~50cmの断面円形ないし方形である。身舎柱穴の掘方は深さ95cm、抜き取り穴以下での平面形は不整形を基調とする。外周の柱穴5基は、50cm四方の隅丸方形を呈する掘方をもち、深さ35cm以下を計る。このうち2基で約22cm四方の方形柱痕を検出した。柱間距離は、身舎柱穴間で1.8m、身舎柱穴と外周の柱穴間は、北西側で2.1m、北東側で1.7mを計る。身舎柱穴列の方針は、N-62°-Eを示す。

堀立柱建物址外周の溝 SD09・10

SB01の北と東の約1.5m外側には幅30~55cmの溝SD09とSD10が廻る。溝はSB01の柱筋ごとに食い違いをみせ、さらにその内部が部分的に長さ60cmを単位とする布掘り状になって小穴を作りなど、雨落ち溝ではなく板塀などの構造物の掘方と想定される。溝が二重になる部分はSB01の建て替えに伴うものであろう。須恵器杯・杯蓋の小片が出土した。



第10図 SB01周辺構造変遷図 (1/200)

第4節 柵址

S A01はS B01の北側で検出された。N-66°-Eの方位に5基の柱穴が並び、調査区外へ延びる可能性がある。柱穴掘方は概ね60cm四方の不整方形で、深さ22~36cmを計る。3基の柱穴で約20cm四方の不整方形柱痕が認められた。柱間距離は2.18~2.30mである。柱穴の切り合いから、S B01(A)より新しく、S A02より古い。S A02はS B01と重複して検出された。N-54°-Eの方位に4基の柱穴が並ぶ。柱穴掘方は概ね40cm四方の不整方形で、深さ24~27cmを計る。全柱穴で径15~20cmの不整円形柱痕が認められた。柱間距離は1.33~1.74mである。柱穴の切り合いから、S B01(A)やS A01より新しいことが分かる。

第5節 土坑

第1調査地区で7基の土坑を検出した。SK01は長軸78cm以上、短軸66cmの隅丸長方形を呈し、深さ25cm。SI01の北方に位置し、長軸方位N-46°-WはSI01と直交する。覆土は、炭化物・焼土・木屑が混在し、モモ核1点が含まれるなど、SI01と類似する。須恵器(図面22-1117)、土師器(図面18-1005)、被熱した穀が出土した。SK02は長軸1.90m、短軸1.01m、深さ26cm。SK03は長軸1.65m、短軸0.88m、深さ24cm、ともに隅丸長方形を呈し、規模・形状・覆土の類似から同時期の所産と推測される。土師器、須恵器が出土した。SK04は長軸1.10m、短軸0.45m、深さ23cm、梢円形に近い平面形である。SK05は長軸3.92m、短軸0.27~0.52m、深さ40cmを計る。SK06は長軸3.58m、短軸0.32~0.47m、深さ22cmを計る。SK05・06は、溝状に長い形状と規模が類似し、長軸方位もN-44°-Eであるため、同時期の所産と推測される。土師器、須恵器が出土した。SK07は規模が不明ながら、須恵器(図面22-1105)が出土した。第2調査地区では2基の土坑を検出した。SK08は残存長軸1.34m、短軸0.98mの長方形を呈し、深さ10cmである。土師器、須恵器が出土した。SK09は長軸0.72m、短軸0.57m、深さ23cmの長方形を呈する。

第6節 溝

第1調査地区で10条の溝が検出された。SD01はSI01の北方を東西に走向する溝である。当初は幅4.2m、深さ35cmの自然流路であったと考えられ、のちに幅2.0m、深さ30cmへと掘り直されている。平安時代の土師器・須恵器や輪羽口片を含むSD01最終埋没土(1層)が堆積する直前には、覆土が同質のSD02~SD08が掘削される。これらの溝は幅16~94cm、深さ8cmと小規模であるが、土師器・須恵器を多く含む。SD04~SD08はN-15°-Wの方位で掘うことが注意される。

第2調査地区では7条の溝が検出された。SD11は幅5m、深さ27cmの深い窪地状を呈し、自然流路段階のSD01に相当するとみられる。同様にSD12は掘り直し後のSD01に相当し、幅約2.0m、深さ30cmを計る。北岸肩部で須恵器杯(図面19-1020)が逆位で出土した。SD13~SD16は南北に走向する溝で、古代の土師器・須恵器に加えて、SD16では青磁・陶器の小片が出土した。SD13は幅85~95cm、深さ10~26cmの溝が数度掘り直されている。SD14は幅1.15m、深さ20cm、SD15は幅45cm、深さ18cmを計る。SD16は幅0.6~1.3m、深さ24cm以下の溝が繰り返し掘削されたものである。SD17は幅35cm、深さ13cmを計る。

第3章 遺物

第1節 土器類

土器器

図面18に11点（1001～1011）図示した。内訳は、皿1点（1001）、壺7点（1002～1008）、鍋3点（1009～1011）である。皿1001は、全体的に研磨され赤彩されている。壺は、口径により、やや大型の1002（口径19.6cm）、中型の1003（口径16.7cm）、小型の1004～1007（口径8.6～11.8cm）に区分される。鍋とした3点（1009～1011）は、口縁・胴上部しか残存していないが、大きさや傾きにより鍋とした。口径は、35.2～37.4cmで、カキ目による調整が施されている。

須恵器

図面19～22に107点（1012～1118）図示した。内訳は、杯101点、壺・甕類6点である。

杯は、高台が付かない杯Aと高台が付く杯Bに区分される。杯Aは1012～1063である。ロクロ調整をして、底部をヘラ切りしている。内面にナデがみられるのは、1012・1014～1018・1027・1040・1042・1059である。1059は異質なものである。一応この杯Aとしたが、精良な胎土で、底部はヘラ削りしている。1044・1049は底部外面にヘラ状具で研磨されたようになっている。1052には油煙が付いている。杯Bは1064～1085である。高台下方や外下方へ短くしつかり延びるものである。底部はヘラ切りが基本である。ヘラ削りが施されているものは、1081・1084である。内面にナデがみられるものは、1064・1078・1079である。杯Bで底部外面にヘラ記号が付くものがある。1067は「×」で、1084は「大」である。1092～1112は杯蓋で、高台付き杯Bと組み合うものとされている。口縁部は下方へ短く折れ、天井部中央に扁平な宝珠形つまみが付く形態である。ヘラ切りが基本で、天井部にヘラ削りがみられるものは、1093・1096～1098・1102・1105・1110である。1093・1096・1100・1102は、内面にナデがみられる。

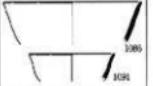
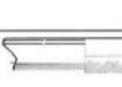
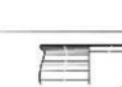
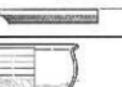
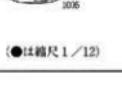
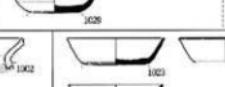
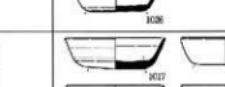
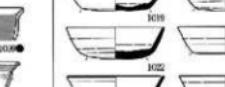
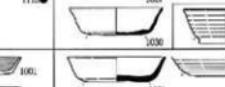
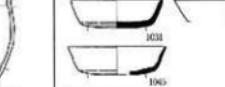
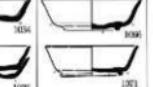
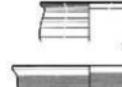
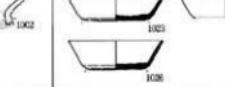
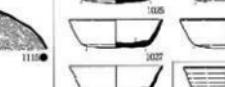
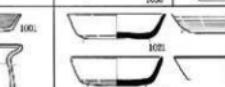
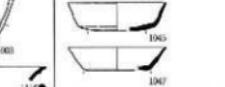
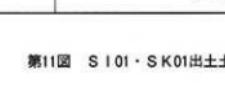
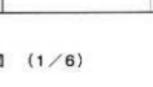
壺・甕類は1113～1116である。1113・1114が壺の肩部と底部、1115・1116が甕、1117・1118は蓋蓋である。

第2節 木製品

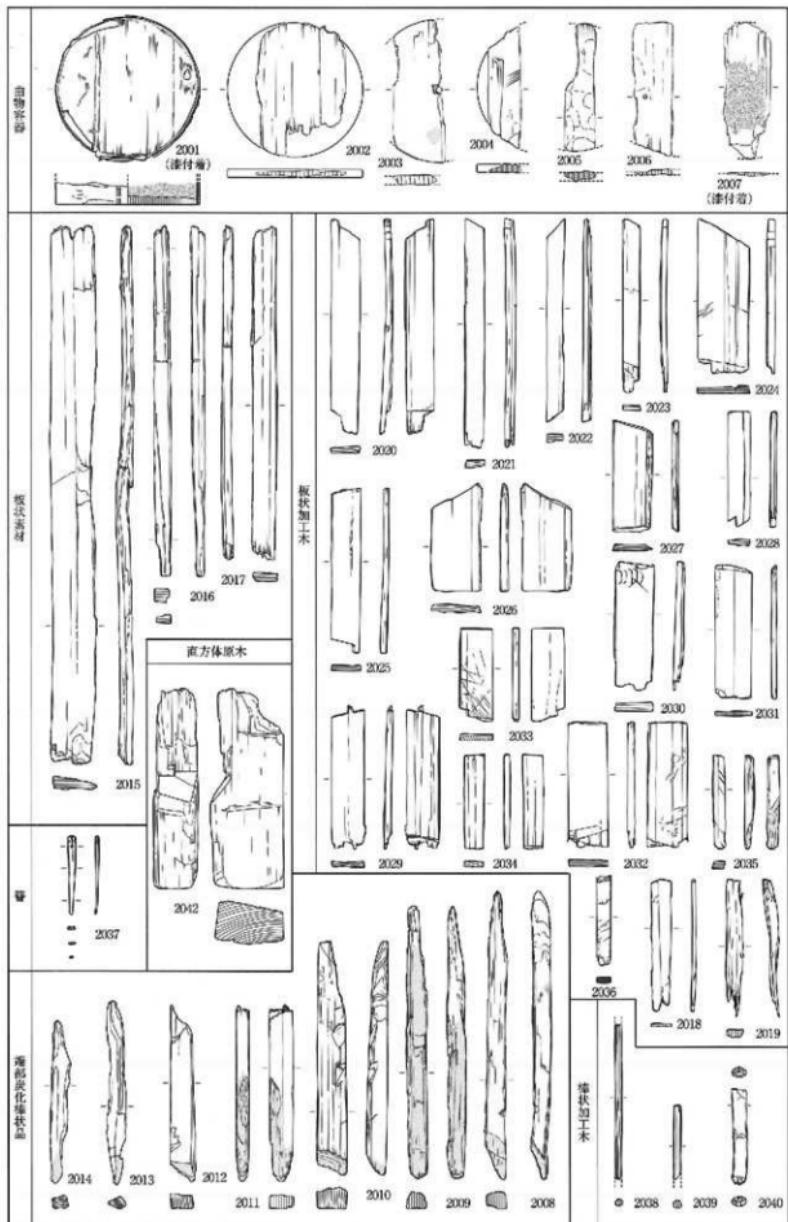
堅穴建物址S I 01の木製品41点（未製品を含む）、掘立柱建物址S B 01の柱材1点、S D 01東側のS P 01の柱材1点を図示した。図示したS I 01出土木製品の種類別点数は曲物容器7、端部炭化棒状品7、直方体原木1、板状素材3、板状加工木19、棒状加工木3、替1である。他に第2面の縦物片がある。

曲物容器（図面23）

2001～2007は曲物容器の底板である。2001は樹皮紙により縫じ合せた側板が残存するが、底板との結合方法は不明である。底板の直径は2001が17.6cm、2002が16.6cm、2003が17.5cmである。その他も推定径15.7～16.7cmのほぼ同一規格である。厚さは0.5～1.3cm、木取りは全て柾目である。2003は中央部に焼成による穿孔があり、蓋板あるいは蒸器のサナとして使用された可能性もある。2004の表面には一定方向の刃当たり痕が、2005の表面には繩状工具による粗い削り痕が残る。2006には補修孔とみられる小孔がある。2001・2007は漆液容器として使用されたものである。

	土器器表・須恵器表はか	須恵器表A	須恵器表B	須恵器表蓋・蓋表
第1面				
第2面(裏表裏)	          	          	    	
S 101 1				
第2面(裏表裏)	      	      	     	
第3面(裏表裏)	 	 	 	
SK01	(●は縮尺1/12)			

第11図 S 101・SK01出土土器集成図 (1/6)



第12図 S 101出土木製品集成図 (1 / 6)

端部炭化棒状品（図面24）

2008～2014は、棒状品の一端が炭化したものである。2008～2012は長さ21.8～35.6cmを計る。断面長方形の棒状材が切がないし折られたもので、端部を加工した痕跡はない。2009・2011は、板材で補強されたS I 01溝状土坑内の埋ぎわで出土していることから、板材を固定するための杭として使用された可能性がある。2013は長さ22.6cm、2014は長さ20.0cmを計る。断面不整円形を呈し、端部に加工痕はみられない。杭としては脆弱なので、発火具などの用途が考えられる。

板状素材（図面25）

2015～2017は、直方体原本などから剥ぎ取られたもので、分割によって板状品の素材を複数取り出すことができるものである。2015は長さ65.3cm、幅5.5cmを計り、S I 01出土木製品のなかで最長である。2016は長さ43.1cm、幅2.1cm、2017は長さ41.0cm、幅3.9cmを計り、S I 01からはほぼ同じ法量の板状素材が多数出土している。2017の側面にみられる斜方向の切り込みは板状加工木と共通している。

板状加工木（図面25～27）

2018～2036は、直方体原本ないし板状素材から切断あるいはキリオリされて取り出された板状品である。幅は2.3cmと4.6cmに分布の中心があり、2.3cmを単位とする規格性が窺われる。長さは16～17cmが多い。2020～2029は、一端または両端に斜方向の切がないしキリオリ痕が残るものである。切断は両側面から行われ、端面には縫や食い違いを生じている（2020、2025～2028）。2024は切断とキリオリによって長さを確定したのに、幅3.2cm・1.4cm・1.6cmに三分割される。2021～2023も同様の分割によって生じたとみられるもので、幅2.1cmに揃っている。2026の下端は直方体原本の端部が残っている。2029は両端をキリオリしているが、斜めに折られる。このように端部を斜めに加工した板状品はS I 01溝状土坑から多数出土している。一方、2030～2034は短冊型の板状品である。2030は長さ16.8cm、幅4.7cmである。両端を折られており、表面に迷走する工具痕が残る。2031は長さ16.5cmで、両端が切断されたのち、幅2.3cmと2.1cmに分割されている。2032は長さ16.4cm、幅4.9cmで、切断とキリオリが併用され、片面には一定方向の工具痕が残る。2033は長さ11.4cm、幅4.1cmの柾目材である。表面に不定方向の刃当たり痕がみられ、曲物底板などからの転用が考えられる。2034は長さ11.6cm、幅2.5cmを計り、両端は切断されている。未製品あるいは削肩とみられるもので、S I 01溝状土坑から類似品が多く出土している。2018は長さ16.2cm、幅2.5cm、厚さ0.4cmで、下端を欠損するが、上端は主頭状に切り落とされている。表面は平滑だが、裏面は原本から割り取られたまま無調整である。斎弔ないし人形の未製品とみられる。2019は長さ17.0cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmの柾目材で、下端は折れている。片面に上方からの切り込みがあり、斎弔の未製品の可能性がある。2035・2036は片面に斜方向の工具痕が残り、2035の下端は炭化している。

簪（図面27）

2037は長さ9.7cm、幅1.0cmを計る。上端は主頭状を呈し、端部から7mm下方には左右からの切り欠きがある。柾目材であるが、表裏は研磨され光沢がある。下半は厚さ2mmと薄く、わずかに反っている。上端から1.3cm下方に孔があるが、穿孔の際に亀裂が入り、腐棄されたものとみられる。

棒状加工木（図面28）

2038・2039は、断面が多角形に加工された棒状品で、箸の可能性がある。2038は幅0.9cm、2039は幅1.0cmを計る。2040は部分的に表皮が残る芯持ち材である。下端を削って尖らせている。径1.8cmである。

直方体原本（図面28）

2042は長さ24.6cm、幅9.0cm、厚さ5.5cmの直方体を呈する。下端から10.5cm上の側面には斜方向の切断面

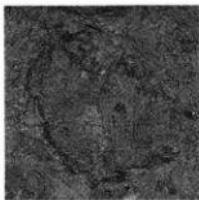
が深さ4cmほど及んでいる。板状素材を取り出す原本と考えられる。

柱材（図面28）

2043はS B01の柱材で、残存長12.1cm、推定径40~50cmである。斜めに切断されている。2044は残存長16.5cm、残存幅15.5cmである。

縄物（第13図）

S I 01第2画北西部の床面から、縄物の小片が出土した。



第13図 縄物出土状態

第3節 動物遺体

試料

試料は堅穴建物址S I 01のカマド状施設及びその周辺から出土した動物遺存体7点（資料1~5）である。

分析方法

試料を肉眼及び実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種類及び部位を明らかにする。

結果

検出された分類群一覧を第1表に示す。S I 01から検出された試料は、いずれも白色を呈する焼骨であり、これらの焼骨からは、魚類2種類（スズキ目スズキ亜目アジ科ブリ類、スズキ目スズキ亜目タイ科タイ類）と、獸類が検出された。以下に、各分類群の検出状況を記す。

（1）魚類

・ブリ類

資料1-1から左主上顎骨（1点）、資料4から左前上顎骨の可能性がある破片（1点）が検出された。資料1-1の形状を考慮すると、比較的小型のブリ類と考えられる。

・タイ類

資料3から尾椎片（1点）が検出された。

・その他

資料1-2、1-3、2から魚骨片が検出された。いずれも、種類・部位などは不明である。

（2）獸類

資料5から獸類の破片（1点）が検出されたが、小破片のため種類や部位などの特定に至らない。

考察

S I 01から検出された動物遺存体は、魚類のブリ類とタイ類、獸類に同定された。これらの試料は、堅穴建物址カマド状施設とその周辺から出土したことや、焼骨の特徴が認められたことから、利用後の残渣の状態で被熱の影響を受けたことが推測される。さらに、検出された分類群のうち、ブリ類やタイ類などの魚類は沿岸部表層から内済などに棲息する魚類であることから、沿岸域で採取されたものが遺跡内に持ち込まれ、利用されたと推測される。また、これらの試料が残存していたことを考慮すると、カマド状施設内には小型魚類の椎骨などの微細な試料が存在している可能性もある。今後はカマド状施設内や周辺の土壌などを対象とした水洗選別による微細な試料の抽出を行うなど、より詳細な食糧資源の検討が期待される。

第1表 検出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
条鰓亜綱	Subclass Actinopterygii
スズキ目	Order Perciformes
スズキ亜目	Suborder Percoidei
アジ科	Family Carangidae
ブリ類	<i>Seriola</i> sp.
タイ科	Family Sparidae
タイ類	Gen. et. sp. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
獸類	Ord. et. fam. indet.

第4節 種実遺体

試料

試料は、東木津遺跡1区のSK01、SI01の2遺構より検出された種実遺体など1371点である。

分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本及び石川1994、中山他2000などの対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後の種実遺体は、種類ごとに容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施し、保管する。

結果

結果を第2表に示す。試料1371点からは、被子植物30分類群1052個の種実が検出された。栽培植物は、スモモ8個、モモ57個、イネの胚乳71個、穎98個、アサ173個、マメ類2個、メロン類115個、トウガン1個、ヒヨウタン類12個と、栽培種の可能性があるナス科160個が確認された。この他に、木本種実12分類群（オニグルミ、ハンノキ並属、クリ、ブナ科、コブシータムシバ、クスノキ科、サンショウウ属、ウルシ属、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、クマノミズキ）246個、草本種実9分類群（ミクリ属、イネ科、カナムグラ、イシミカワ近似種、タデ属、コウホネ属、マメ科、キカラスウリ、スズメウリ）109個、種類・部位不明の種実17個が確認された。種実以外では、木材、炭化材、地下茎と思われる植物片、種類・部位不明の植物片、昆虫など303個が確認された。検出された種実の状態は比較的良好で、栽培植物のモモの一部、イネの胚乳と穎の一部、マメ類と、木本のオニグルミの一部、ブドウ属の一部に炭化が認められた。

考察

（1）栽培植物

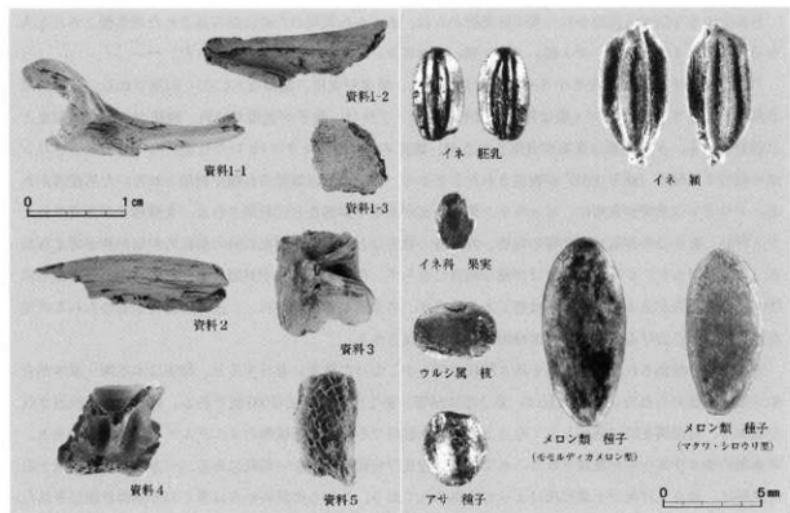
SK01・SI01から検出された種実分類群からは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種とされるスモモやモモ、イネ、アサ、マメ類、メロン類、トウガン、ヒヨウタン類が確認された。

このうち、木本類のスモモやモモは、観賞用の他、果実が食用、薬用などに広く利用される。一方、草本類では、イネは胚乳、マメ類は種子が食用とされ、アサは、種子が食用や油料、纖維が衣料や繩用などに利用される。メロン類は果実が食用されるが、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型に該当する種子（藤下1984）が検出されたことから、本遺跡では複数の品種が利用されていた可能性がある。トウガンは果実が食用に、ヒヨウタン類は果実が食用や容器などに利用される。大型種子が確認されたナス科は、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられる（青葉1991など）が、現段階では詳細な検討に至らず、種類の細分化が課題とされる。このような栽培植物（その可能性がある種類）の可食部である種実が、各遺構から検出され、一部には炭化が認められる状況から、当該期におけるこれらの栽培植物の利用が推測される。

SI01から検出された不明種実を除き種類が明らかとなった種実に着目すると、種実は木本類・草本類合せて1051個認められた。その内訳は、第2面は64個、第1面溝状土坑は987個である。第2面から検出された種実は、発掘調査時に個体として地点上げされた試料であり、有用植物のオニグルミ、栽培植物のモモ、草本類のキカラスウリが確認されたのみで、試料数及び分類群は少ない傾向にある。一方、第1面溝状土坑の試料は、地点上げ及び土壤洗出によって抽出されており、これらの試料からは多くの分類群が検出された。比較的多く検出された分類群は、木本類ではオニグルミやクリ・ブナ科（クリ？）、モモ、サンショウウ属、

資料番号	出土場所	地層	種類	測定値		測定者	記載																																				
				長	幅																																						
				cm	mm																																						
1	第2面																																										
2	第2面																																										
3	第2面																																										
4	第2面																																										
5	第2面																																										
6	第2面																																										
7	第2面																																										
8	第2面																																										
9	第2面																																										
10	第2面																																										
11	第2面																																										
12	第2面																																										
13	第2面																																										
14	第2面																																										
15	第2面																																										
16	第2面																																										
17	第2面																																										
18	第1面(秋)土堤上部																																										
19	第1面(秋)土堤上部																																										
20	第1面(秋)土堤上部																																										
21	第1面(秋)土堤上部																																										
22	第1面(秋)土堤上部																																										
23	第1面(秋)土堤上部																																										
24	第1面(秋)土堤上部																																										
25	第1面(秋)土堤上部																																										
26	第1面(秋)土堤上部																																										
27	第2面(化粧刷)																																										
28	第1面(秋)二三上層			2	2	9.45	3	1	3	4	3	1	17	16	6	1	119	34	6	1	26	11	51	29	47	29	135	1	2	3	1	3	156	1	1	85	6	51	275				
29	第1面(秋)二三上層			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	6											
30	第1面(秋)二三下層中央部			6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	6								
31	第1面(秋)二三下層中央部 合			3	1	1	2	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	3	1	1	1	1	1	5							
32				47	112	21	9.52	1	1	3	4	3	17	234	79	8	120	5	6	1	47	13	85	133	89	26	147	1	21	1	1	2	3	160	8	11	1	1	15	121	5	12	230

第2表 S 101種実同定結果



第14図 S 101第2面出土動物遺体

第15図 S 101第1面出土種実遺体

ブドウ属、草本類ではイネ、カナムグラ、アサ、ナス科、メロン類が挙げられ、カナムグラを除くといずれも有川植物や栽培植物、これらの分類群を含む種実が多く検出される傾向にある。炭化が認められた分類群も、これらの種類にのみ確認されており、上記した本遺跡における植物利用を支持する状況といえる。

また、第1面溝状土坑における分類群の検出状況の比較では、溝状土坑中央部ではブナ科（クリ？）、イネ（胚乳）、アサ、メロン類、溝状土坑南部ではイネ（頸）、メロン類、さらに第2面炭化材中ではイネ（胚乳）が多く検出されており、やや異なる様相が認められた。ただし、洗出を行った土壤量の比較や、覆土の堆積状況や由来などと併せて検討する必要があり、詳細な評価については今後の課題である。

なお、本遺跡では、奈良～平安時代前期頃とされる溝造構（S D60）などから検出された種尖遺体を対象とした調査が実施されている（株式会社古環境研究所2001）。この調査結果によれば、モモやヒヨウタン類の検出が顕著であり、この他に、ナシ属やウリ類、トウガラ、ササケ属などの栽培植物や、カヤ、イヌガヤ、オニグルミ、クリ、サンショウ、ブドウ属などの有用植物、開けた草地などに生育する分類群や水湿地生の種実が検出されており、本分析結果とはほぼ調和する傾向といえる。一方、S 101では、栽培植物のイネやアサが多く検出されており、異なる特徴として指摘される。

（2）栽培植物を除く種実分類群

前述した栽培植物及び不明を除く種実分類群は、木本12分類群（オニグルミ、ハンノキ並属、クリ、ブナ科、コブシータムシバ、クスノキ科、サンショウ属、ウルシ属、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、クマノミズキ）、草本9分類群（ミクリ属、イネ科、カナムグラ、イシミカワ近似種、タデ属、コウホネ属、マメ科、キカラスウリ、スズメウリ）が確認された。木本類は全て広葉樹であり、河畔林要素のオニグルミやハンノキ並属、伐採地や崩壊地や林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種が確認された。これらは、本遺跡周辺域の河川沿いの低地や人里と林地の境界付近に生育していたものに由来すると考えられる。草本類は、明るく開けた場所に生育する人里植物に属する分類群が確認され、調査区周辺域の草地などに生育していたものに由来すると考えられる。また、水生植物のミクリ属、コウホネ属や、湿った場所に生育するスズメウリなどが認められることから、周辺域に水湿地の存在が推定される。これらの分類群の検出状況は、過去の分析調査結果で確認されている傾向と調和的である。また、これらの自生していたと考えられる分類群のうち、オニグルミ、クリは、堅果が食用・長期保存可能な有用植物である。キイチゴ属、ブドウ属は果実が食用可能で、サンショウ属、ウルシ属の一部などには、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられる（青葉1991など）。

引用文献

- 青葉 高 1991 『野菜の日本史』八坂秀房 317p.
藤下 典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎 638-651.
石川 茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
南木 駿彦 1991 『栽培植物』『古墳時代の研究4 生産と流通I』 雄山閣 165-174.
南木駿彦他 2000 「大型植物遺体」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 琵琶湖底遺跡自然流路（栗津湖底遺跡Ⅱ）』滋賀県教育委員会・財团法人滋賀県文化財保護協会 49-112.
中山至大他 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大出版会 642p.
矢野 梢 2002 「遺跡から出土した小型豆のDNA分析」『DNA考古学Newsletter3』
吉崎 昌一 1992 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』No.355 ニュー・サイエンス社 2-14.
株式会社古環境研究所 2001 「第5節 種実」『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』 高岡市教育委員会 71-78.

第4章 結語

第1節 挖立柱建物址 S B01

掘立柱建物址 S B01は、全容が明らかではないが、大型の柱穴規模に加え、庇ないし縁側とみられる外周柱穴や遮蔽施設の存在など、既往の東木津遺跡における掘立柱建物址にない構造的特徴を備えている。建て替えが一度認められ、最終的に柱の抜き取りなし切断により解体されている点も特徴的である。明確な時期を特定できないが、遮蔽施設の掘方からわずかに須恵器杯や杯蓋が出土しており、既往の掘立柱建物址と同じ8世紀後半～9世紀前半のなかで捉えられる。S B01の位置は、既往の掘立柱建物址のなかで最も北に位置し、背後を S D01に接している。集落内の中心的な祭祀場とされる都計道路地区 S D60橋梁施設の北西方向にある（図面01）。ところで官衙や貴族の邸宅などの施設内には、敷地の北西隅（亥亥隅）に神を祀ることが知られ、中央や国府レベルでの信仰が9世紀以降であるのに対し、郡家レベルでは8世紀代に遡るうえに、施設（神殿）の規模も大きいという指摘がある（平川2003）。東木津遺跡は、計画的な建物配置、土器に占める食膳具の比率の高さ、木簡などの文書資料から、古代射水郡における官衙的な集落と考えられている（荒井他2001）。S B01から宗教的遺物は出土していないが、集落北西隅の立地や特異な構造的特徴は、亥亥隅信仰に基づく宗教的施設と共通する要素であり、今後S B01の性格さらには官衙構造が明らかになることが期待される。また都計道路地区における瓦塔や「海廻」墨書き器の出土から想定されている仏教的施設との関係も注意されるところである。

第2節 穫穴建物址 S I 01

漆闇連遺物

第1面から第3面において、漆の付着した曲物底板及び須恵器杯、曲物漆容器の蓋紙の可能性がある木質遺物が出土し、S I 01が漆の保管に関わっていたことが窺われる。都計道路地区 S D60における漆の付着した刷毛の出土によって、集落内での漆塗り作業は確實視されるが、S I 01や既往の東木津遺跡において漆器製品は出土していない。むしろ近接する掘立柱建物址 S B01の特殊性を重視すれば、S B01の柱材などへの漆塗りが想定される。古代官衙遺跡における建物造営と漆闇連遺物出土との密接な関連性は、宮城県多賀城跡などでも指摘されており（平川1989）、S B01と S I 01の関連性は高いといえる。この他、第2面で一括出土した歪みの顕著な須恵器杯（1034～1039）は、発泡による器面の荒れや施着を伴い、食膳具としての用をなさないものである。窓から持ち出された不良品が、漆塗りのバレットとして保管されていたと推測される。このことは木遺跡に深く関わる須恵器窓の存在を示唆しており、窓の特定が課題となる。

板状加工木

第1面漆状土坑から出土した板状加工木（2018～2036）は、長さ11.0～28.2cm、幅1.5～6.4cm、厚さ4～11mmの板状を呈し、端部にキリやキリオリの痕跡を残すものである。2042のような直方体木本から割り取られたものである。第16図に示した都計道路地区 S D60出土の板状木製品（木簡など）の法量をみると、分布の中心値は長さ13cm、幅1.8cm付近にあり、その多くが愈中である。S I 01出土板状木製品の法量分布は、

緩やかではあるが S D 60 に近い位置に板状加工木の中心値がある。両者とも板目材が圧倒的に多い点も共通しており、法量的には板状加工木が突出の未製品である可能性がある。この中心値に比較して、長さの短いものは削屑、長さないし幅の一方だけが長いものは板状素材と考えられる。板状素材は、2024や2031のように分割によって中心値に近い法量となるものである。板状加工木の端部に多くみられる斜方向のキリやキリオリは、斎車の頭部を半頭（2018）に加工する過程と考えられる（第17図）。この加工が板状素材の分割に先行していること

（2024）は、大量製作に伴う省力化や素材の最大活用を意図した工夫と解され、祭祀場から大量に出土するという斎車の特性と符合する。

多量の種子

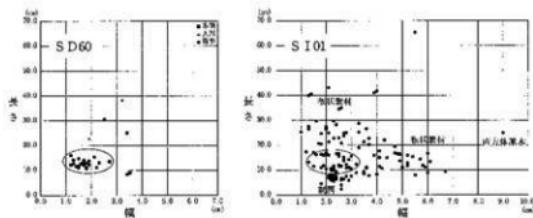
第1面溝状土坑で検出された1371点の種子については、都計道路地区 S D 60 の1793点の組成と異なる様相が認められる。S D 60 に多かったクルミ、ヒヨウタン、ウリはごく少量である。逆にイネ、アサ、メロン類、ナス科は S D 60 ではほとんど出土しなかった種子である。溝状土坑 1 号からはイネの穎及び穎が付着した胚乳が出土した。第1面はカマドのような調理施設をもたないことから、イネの食用以外の利用も想定される。同様に炭化したモモ核は祭祀行為での使用が指摘されるものであり、出土した種子の全てが単なる食用後の廃棄物とはできない。なかでも表面の摩滅したモモ核（2011）は注意される。古代寺院の床板などは、鉋で削ったあとに「木賊、椋の葉、桃核」などで磨くという記録があり（村松1973）、モモ核が木材の研磨具として使用された場合も想定される。

焼成された動物骨片

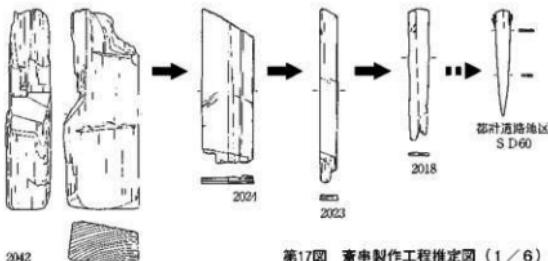
第2面カマド状施設内及び周辺から出土した骨片（獣・魚）は、必ずしも S I 01 における食用の煮炊きを意味するとはいえない。漆器の下地製作技法のひとつに、漆に動物骨片を混入させる技法が存在することが指摘されている（四柳2006）。奈良県明日香村飛鳥水落遺跡の漏刻、滋賀県彦根市松原内湖遺跡の蓋なし身、平城京長屋王邸宅跡の漆器などに例がある。

豈穴建物址 S I 01 の変遷

S I 01 第1面の溝状土坑は、底面に畦による区画を作り出し、木材を水漬けする施設であったと考えられる。b ~ d 区画は、直方体原本や板状素材、板状加工木の出土により、上述の斎車のような板状品製作との



第16図 東木津遺跡、板状木製品法量分布図



第17図 斎車製作工程推定図（1／6）

関わりが強い。逆に f 区はこの種の遺物が少なく、板材による壁の補強や炭化物を含む木屑の堆積など、他の区画とは異質である。f 区の機能をにわかに断定できないが、種子の出土が多いこと、同位置に第 2 面の貯蔵穴状土坑が存在することから、何らかの貯蔵施設であったと推測される。第 1 面では畜串を主体に、簪や棒状品などが少量製作された。漆闇連遺物は曲物底板（2007）のみで、土器片もごく少ないとからすれば、S I 01 は本製品の製作を本来の機能として成立したといえる。

第 2 面ではカマド状施設の構築により削屑の焼却が可能となり、木屑層の堆積はみられなくなる。板状素材は継続して出土しているが、製品の特定はできない。曲物漆容器が出土し、パレットや蓋紙の可能性のある遺物と共に、漆塗り作業の痕跡が強くなっている。第 2 面の床面上には炭化層が堆積し、上層の焼失が推測されるが、カマド状施設が壊されていることから意図的な火災の可能性がある。

第 3 面は、カマド状施設や床面の敷物に第 2 面と同じ構造がみられるが、貯蔵穴状土坑は埋没する。木質遺物は激減するが、蓋紙の可能性のある遺物や漆付着の須恵器片からは、漆塗り作業の継続が窺われる。

第 3 節 まとめ

本調査の最大の成果は、集落内で卓抜した構造を有する掘立柱建物址と、それに付属したと考えられる堅穴建物址の検出であった。S I 01 は第 1 面の木製品製作から第 2 面及び第 3 面における漆塗りへと、その工房としての性格を変容させている。木製品製作の中心を占めたと思われる畜串は、都計道路地区 S D60・S X06 や堀井地区 S X06 などの水辺の祭祀場で多く出土しているが、一方で都計道路地区的ピット（S P04）から出土した 4 点の畜串が注意される。このピットは S D60 橋梁施設に関連した門ないし鳥居状の施設と想定されるピットのひとつであり、ピット内の畜串には呪術的ないし地鎮的意味合いが考えられる。S B01 の身舎柱穴から出土した複数の板状木片は、S I 01 で製作された畜串が柱の設置に際し埋納された痕跡の可能性がある。また、その後の S I 01 における漆闇連遺物の出土が、S B01 の柱材などへの漆塗りに伴う類推されることは、堅穴建物址 S I 01 の成立が S B01 の建築を契機とし、その後も S B01 の建設に連動していることを示唆している。言いかえれば S I 01 第 1 面は S B01 建築前に使用された畜串などの製作拠点、第 2 面は S B01 の柱材などの漆塗りを行う拠点として機能したことになる。第 2 面及び第 3 面にみられた床面の敷物は漆に対する砂埃の防止とみられ、カマド状施設は漆に対する温湿度管理や炭の生産を兼ねたものと理解される。炭は先述の動物骨片と同じく炭粉として漆の下地へ混入したり、什上げの研磨に使われるものである。第 2 面の焼失は、S B01 建築の完了に伴う工房の一時的な閉鎖とも捉えられるが、S B01 の明確な時期が確定しない現段階では推測の域を出ない。S I 01 第 1 面から第 3 面は、土層の観察からも連續した堅穴建物址と考えられ、8 世紀後半を主体とする時期を示す。また S I 01 に類似する遺物を出土した S K01 や、S I 01 の須恵器杯 1027 との接合片を出土した S K06、S I 01 木屑層に似た黒色土の堆積が認められる S K05 の存在からは、工房址のさらなる拡張よりも想定される。さらに少量の稚羽口の出土もあり、木工・漆工以外の工房址の所在も今後注意されるところである。

古代において、生産量に限りのある貴重な漆は「寺院建立や副業品製作などの需要を満たすために支配者層に独占されていた。国家は漆樹の植栽を奨励し、中男作物・交易雑物・諸国年料として貢納させ、地方の官衙でも単に漆の集荷だけでなく、漆器の生産を行っていた」とされる（四柳 2003）。県内での漆闇連遺物は少なく、入善町じょうべのま遺跡（漆箆、漆刷毛）、高岡市問屋遺跡（カキ目のある漆の木、漆記号をも

つ須恵器杯)、水見市総領浦之前遺跡(漆塗り筒型容器、漆書き土器)、小矢部市桜町遺跡(漆パレット・漆書き土器)が挙げられる。いずれも葬家や在地領主関連遺跡と考えられている。東木津遺跡は既往の調査における漆刷毛や漆紙文書に統き、今回の曲物漆容器の出土によって、集落の官衙的性格が再確認されることとなった。

参考文献

- 阿部義平他 1974 「井波町高瀬遺跡・入善町じょうべの主遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会
 荒井 隆他 2001 「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告書」高岡市教育委員会
 川崎 晃 2001 「越」木棺発見者・飛鳥池遺跡出土木棺と東木津遺跡出土木筒」
 「高岡市万葉歴史館研究紀要」第11号 高岡市万葉歴史館
 川崎 晃 2002 「氣多大神宮守木筒と難波津歌木簡について -高岡市東木津遺跡出土木筒補論-」
 「高岡市万葉歴史館研究紀要」第12号 高岡市万葉歴史館
 久々島義他 2003 「小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ」 小矢部市教育委員会
 平川 南 1989 「漆紙文書の研究」 吉川弘文館
 平川 南 2003 「古代地方木筒の研究」 吉川弘文館
 前田 要 2004 「乾漆浦ノ前遺跡出土の漆器について -コップ形須恵器を中心に」
 「富山考古学研究」第7号 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
 村松貢次郎 1973 「大工道具の歴史」岩波書店
 山中 章 1992 「考古資料としての古代木簡」「木簡研究」第14号 木簡研究学会
 山中敏史編 2003 「古代の官衙遺跡 -道構編-」奈良文化財研究所
 四柳 薫章 2002 「漆の技術と文化 -出土漆器の世界-」「いくつもの日本Ⅱ あらたな歴史へ」 岩波書店
 四柳 薫章 2003 「富山県高岡市問屋遺跡出土漆器の科学分析」「問屋遺跡調査報告Ⅲ」高岡市教育委員会
 四柳 薫章 2006 「漆!」、「漆II」法政大学出版局

報告書抄録

ふりがな	ひがしきづいせきちょうさほうこく							
書名	東木津遺跡調査報告							
副書名	市道清水町三丁目西藤平蔵線工事に伴う平成18年度の調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第14冊							
編著者名	山口辰一、常深尚							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号							
発行年月日	西暦 2007年3月15日							
ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
東木津遺跡	富山県高岡市 木津	016202	202150	36° 43° 37°	136° 59° 45°	060901 1 061105	335m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東木津遺跡	集落址	奈良平安時代	竪穴建物址1軒 掘立柱建物址1棟 横壁2基 上坑9基、溝17条	土師器、須恵器、 木製品(曲物、簪、柱 材、穀物、木製品)、 輪羽口、 骨、種子、昆蟲	木製品製作や漆塗りに関 わる竪穴建物址の検出			

別 表

土 器 類 観 察 表

番号	図面	種類	口径	特	徵	出土位置
1001	18	土師器・皿	16.9	全体的に、研磨・赤彩されている。		S I 01, 3面
1002	18	土師器・甕	19.6	肩部は、内面が刷毛目、外面がカキ目。		S I 01, 2面
1003	18	土師器・甕	16.7	胴部外面は、上半部がカキ目、下半部がヘラ削り。		S I 01, 3面
1004	18	土師器・甕	11.7	口縁胴上部片。		S I 01, 3面
1005	18	土師器・甕	10.4	胴底部外面はヘラ削り。		S K 01
1006	18	土師器・甕	10.3	胴上部外面は横ナデ、胴下底部外面はヘラ削り。		S I 01, 2面
1007	18	土師器・甕	8.6	口縁部片。		S I 01, 2面
1008	18	土師器・甕	—	胴下底部片。胴下部外面はヘラ削り。		S I 01, 2面
1009	18	土師器・鍋	37.4	胴部は、内面がカキ目、外面がカキ目・ヘラ削り。		S I 01, 3面
1010	18	土師器・鍋	35.6	口縁部内面と胴部はカキ目。		S I 01, 3面
1011	18	土師器・鍋	35.2	口縁部内面と胴部外面はカキ目。		S I 01, 2面
1012	19	須恵器・杯A	13.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S K 01
1013	19	須恵器・杯A	13.2	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1014	19	須恵器・杯A	13.0	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1015	19	須恵器・杯A	12.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1016	19	須恵器・杯A	12.5	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1017	19	須恵器・杯A	12.1	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1018	19	須恵器・杯A	11.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1019	19	須恵器・杯A	11.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1020	19	須恵器・杯A	11.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 12
1021	19	須恵器・杯A	11.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1022	19	須恵器・杯A	11.7	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1023	19	須恵器・杯A	11.7	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1024	19	須恵器・杯A	11.7	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1025	19	須恵器・杯A	11.6	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1026	19	須恵器・杯A	11.4	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1027	19	須恵器・杯A	11.3	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1028	19	須恵器・杯A	11.3	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1029	19	須恵器・杯A	11.2	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1030	19	須恵器・杯A	11.2	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1031	19	須恵器・杯A	11.1	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1032	19	須恵器・杯A	11.0	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1033	19	須恵器・杯A	10.9	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1034	19	須恵器・杯A	10.8	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面

番号	両面	種類	口径	特徴	微	出土位置
1035	19	須恵器・杯A	10.6	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1036	19	須恵器・杯A	10.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1037	19	須恵器・杯A	10.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1038	19	須恵器・杯A	10.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1039	19	須恵器・杯A	10.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1040	20	須恵器・杯A	12.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1041	20	須恵器・杯A	12.7	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1042	20	須恵器・杯A	12.6	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1043	20	須恵器・杯A	12.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1044	20	須恵器・杯A	11.8	底部外側には、ヘラ状具による研磨がみられる。		S D 01
1045	20	須恵器・杯A	11.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1046	20	須恵器・杯A	11.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1047	20	須恵器・杯A	11.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1048	20	須恵器・杯A	11.7	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S K 01
1049	20	須恵器・杯A	11.5	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1050	20	須恵器・杯A	11.5	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1051	20	須恵器・杯A	11.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1052	20	須恵器・杯A	11.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1053	20	須恵器・杯A	11.4	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1054	20	須恵器・杯A	11.3	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S K 01
1055	20	須恵器・杯A	11.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S K 01
1056	20	須恵器・杯A	11.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1057	20	須恵器・杯A	11.1	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 05
1058	20	須恵器・杯A	10.7	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1059	20	須恵器・杯A	—	底部はヘラ削りされている。		S I 01, 3面
1060	20	須恵器・杯A	—	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 13
1061	20	須恵器・杯A	—	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1062	20	須恵器・杯A	—	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 03
1063	20	須恵器・杯A	—	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		I 区 表土
1064	21	須恵器・杯B	14.6	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1065	21	須恵器・杯B	12.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1066	21	須恵器・杯B	12.0	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1067	21	須恵器・杯B	11.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1068	21	須恵器・杯B	11.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1069	21	須恵器・杯B	11.6	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1070	21	須恵器・杯B	11.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1071	21	須恵器・杯B	11.2	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1072	21	須恵器・杯B	11.1	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1073	21	須恵器・杯B	11.9	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1074	21	須恵器・杯B	10.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 2面
1075	21	須恵器・杯B	10.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面
1076	21	須恵器・杯B	10.8	クロコ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01, 3面

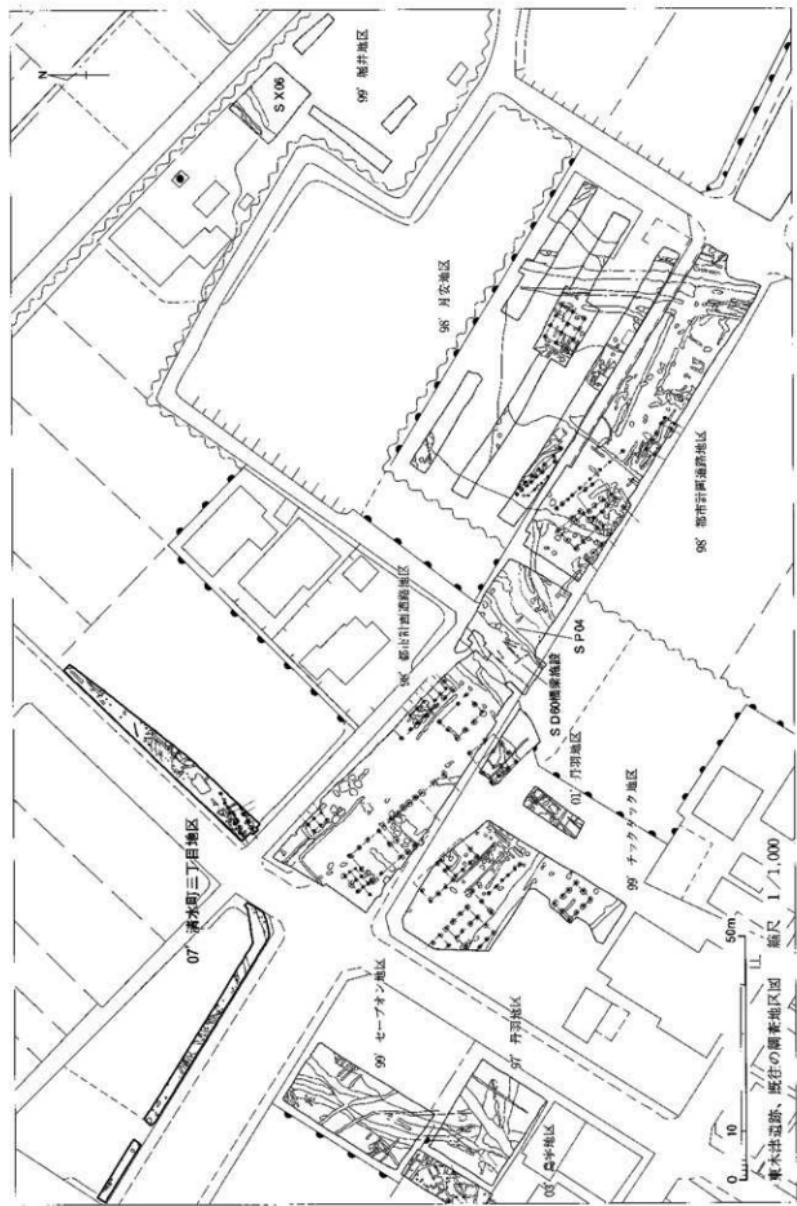
番号	図面	種類	口径	特徴	微	出土位置
1077	21	須恵器・杯B	10.4	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S I 01、3面
1078	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		1区 撫亂
1079	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 12
1080	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		1区 表土
1081	21	須恵器・杯B	—	底部外面はヘラ削りしている。		S I 01、3面
1082	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 13
1083	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S K 01
1084	21	須恵器・杯B	—	底部外面はヘラ削りしている。底部にヘラ記号。		S I 01、2面
1085	21	須恵器・杯B	—	ロクロ調整の後、底部はヘラ切りをして、調整をしない。		S D 01
1086	20	須恵器・杯	16.8	口縁・体部。		S I 01、1面
1087	20	須恵器・杯	12.8	口縁・体部。		S I 01、3面
1088	20	須恵器・杯	11.4	口縁・体部。		S I 01、2面
1089	20	須恵器・杯	12.1	口縁・体部。		S I 01、2面
1090	20	須恵器・杯	11.3	口縁・体部。		S I 01、2面
1091	20	須恵器・杯B蓋	10.4	口縁・体部。		S I 01、1面
1092	21	須恵器・杯B蓋	18.1	宝珠形つまみが付く。		S I 01、3面
1093	22	須恵器・杯B蓋	17.6	宝珠形つまみが付く。天井部はヘラ削り。		S K 01
1094	22	須恵器・杯B蓋	15.2	宝珠形つまみが付く。		S I 01、2面
1095	22	須恵器・杯B蓋	12.9	宝珠形つまみが付く。		S I 01、3面
1096	22	須恵器・杯B蓋	12.7	宝珠形つまみが付く。天井部はヘラ削り。		S I 01、3面
1097	22	須恵器・杯B蓋	12.6	宝珠形つまみが付く。天井部はヘラ削り。		S I 01、2面
1098	22	須恵器・杯B蓋	12.4	宝珠形つまみが付く。天井部はヘラ削り。		S I 01、3面
1099	22	須恵器・杯B蓋	12.3	宝珠形つまみが付く。		S I 01、3面
1100	22	須恵器・杯B蓋	11.9	宝珠形つまみが付く。		S I 01、3面
1101	22	須恵器・杯B蓋	11.2	宝珠形つまみが付く。		S I 01、2面
1102	22	須恵器・杯B蓋	—	宝珠形つまみが付く。天井部はヘラ削り。		S I 01、3面
1103	22	須恵器・杯B蓋	—	宝珠形つまみが付く。		S D 02
1104	22	須恵器・杯B蓋	17.7	天井部中央は欠損している。		S K 01
1105	22	須恵器・杯B蓋	15.6	天井部はヘラ削り。		S K 07
1106	22	須恵器・杯B蓋	13.6	天井部中央は欠損している。		S I 01、3面
1107	22	須恵器・杯B蓋	13.2	天井部中央は欠損している。		S I 01、2面
1108	22	須恵器・杯B蓋	12.7	天井部中央は欠損している。		S I 01、3面
1109	22	須恵器・杯B蓋	12.5	天井部中央は欠損している。		S I 01、2面
1110	22	須恵器・杯B蓋	12.0	天井部はヘラ削り。		S I 01、3面
1111	22	須恵器・杯B蓋	11.7	天井部中央は欠損している。		S I 01、3面
1112	22	須恵器・杯B蓋	8.6	天井部中央は欠損している。		S D 01
1113	22	須恵器・蓋	—	肩部片。		S D 01
1114	22	須恵器・蓋	—	底部片。		S D 01
1115	22	須恵器・壺	22.8	口縁上部片。		S I 01、3面
1116	22	須恵器・壺	47.0	口縁上部片。		S I 01、3面
1117	22	須恵器・蓋蓋	11.4	天井部中央はヘラ削り？		S K 01
1118	22	須恵器・蓋蓋	9.6	天井部はヘラ削り。		S I 01、3面

図 面

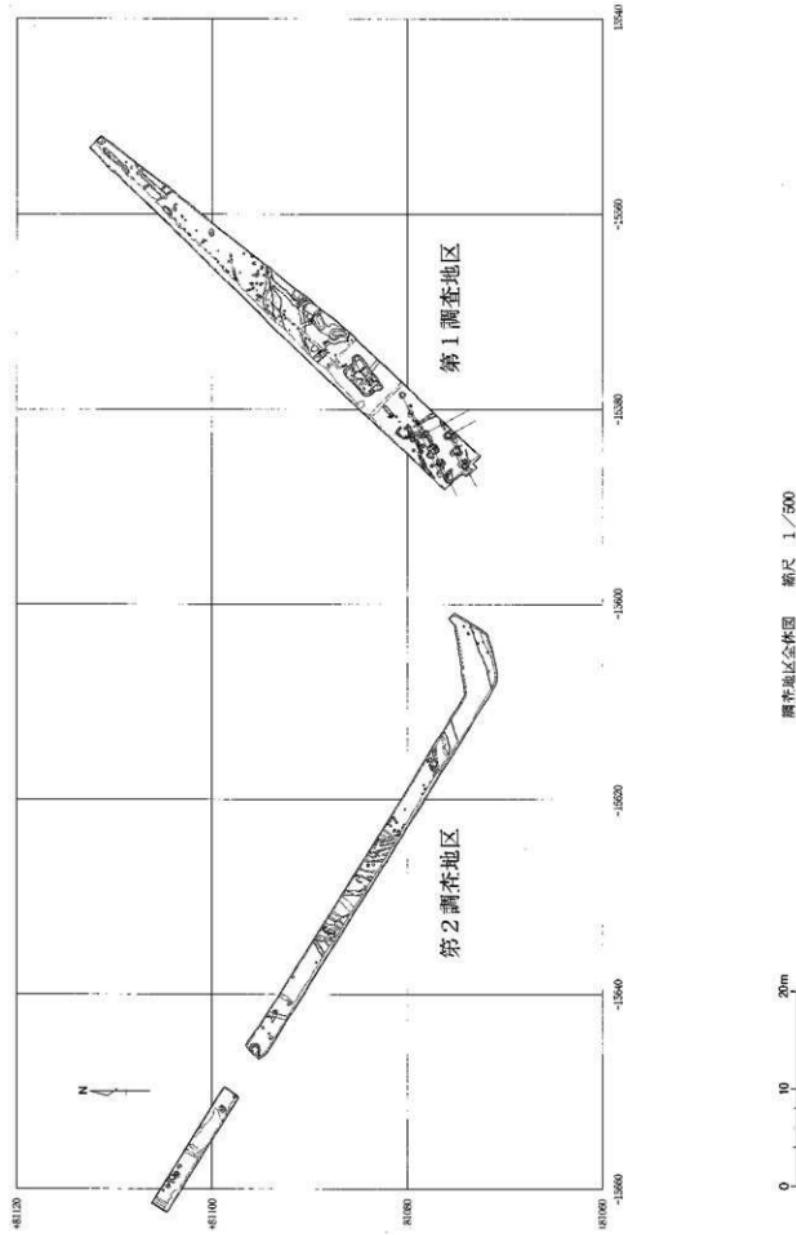
図面目次

- 図面01 遺構実測図 東木津遺跡、既往の調査地区図（1／1,000）
- 図面02 遺構実測図 調査地区全体図（1／500）
- 図面03 遺構実測図 第1調査地区遺構図（1／200）
- 図面04 遺構実測図 1. 第2調査地区遺構図〔1〕（1／200）
2. 第2調査地区遺構図〔2〕（1／200）
- 図面05 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第1面実測図〔1〕（1／40、1／20）
- 図面06 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第1面実測図〔2〕（1／40）
- 図面07 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第1面実測図〔3〕（1／40）
- 図面08 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第2面実測図〔1〕（1／40、1／20）
- 図面09 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第2面実測図〔2〕（1／40）
- 図面10 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第2面実測図〔3〕（1／40）
- 図面11 遺構実測図 壁穴建物址S I 01第3面実測図〔1〕（1／40）
- 図面12 遺構実測図 1. 壁穴建物址S I 01第3面実測図〔2〕（1／40）
2. 土坑実測図〔1〕（1／20）
- 図面13 遺構実測図 捨立柱建物址S B01、横址S A01・02、溝S D09・10実測図〔1〕（1／80）
- 図面14 遺構実測図 捨立柱建物址S B01実測図〔2〕（1／40）
- 図面15 遺構実測図 上坑実測図〔2〕（1／40）
- 図面16 遺構実測図 第1調査地区溝実測図（1／80）
- 図面17 遺構実測図 1. 第1調査地区ピット土層断面図（1／40）
2. 第2調査地区溝土層断面図（1／40）
- 図面18 遺物実測図 土器類 1. 鉢器（1／3）
- 図面19 遺物実測図 土器類 2. 瓶器（1／3）
- 図面20 遺物実測図 土器類 3. 罐器（1／3）
- 図面21 遺物実測図 土器類 4. 盆器（1／3）
- 図面22 遺物実測図 土器類 5. 罐器（1／3）
- 図面23 遺物実測図 木製品 曲物容器（1／3）
- 図面24 遺物実測図 木製品 端部炭化棒状品（1／3）
- 図面25 遺物実測図 木製品 板状素材、板状加工木（1／3）
- 図面26 遺物実測図 木製品 板状加工木（1／3）
- 図面27 遺物実測図 木製品 板状加工木、管（1／3）
- 図面28 遺物実測図 木製品 棒状加工木、モモ核、直方体原木、柱材（1／3、実大）

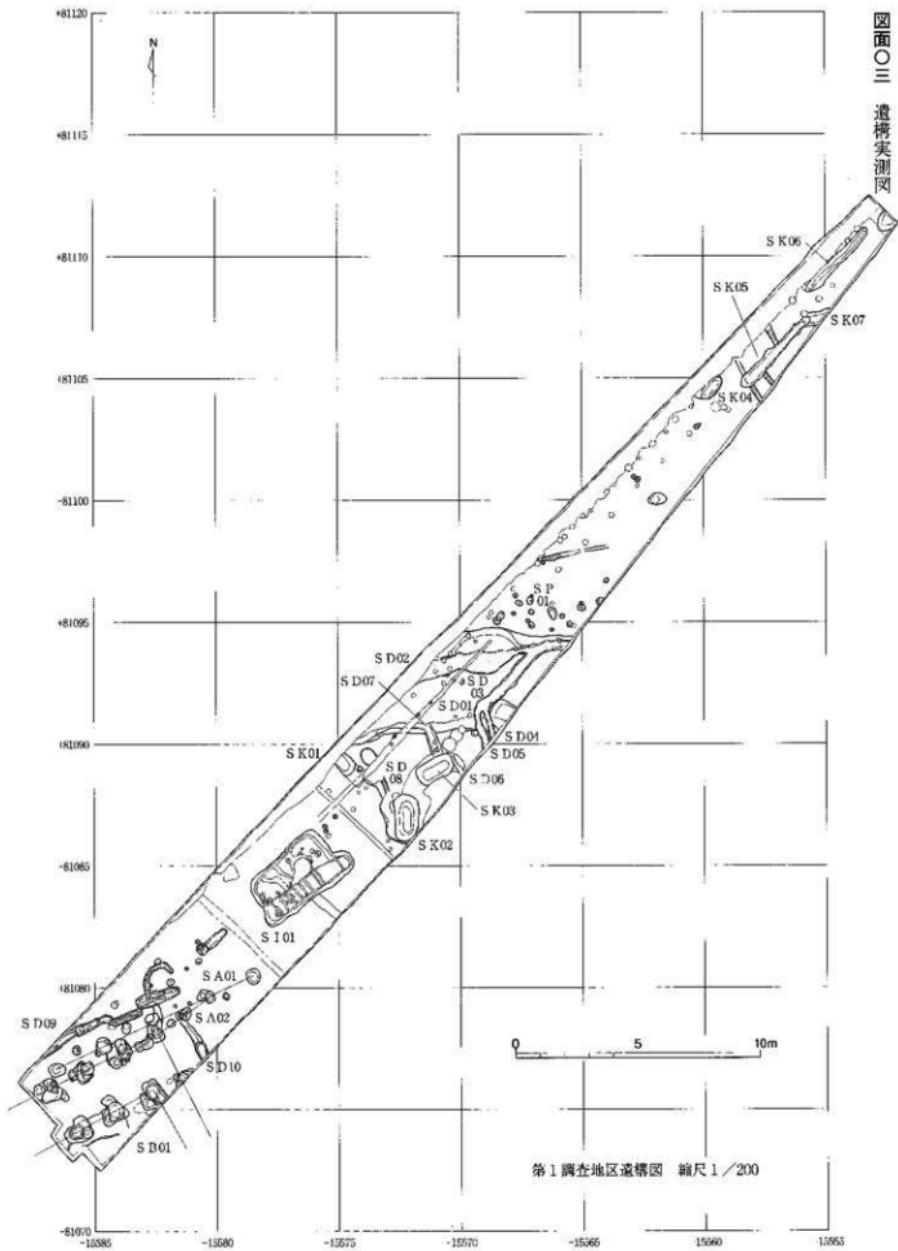
図面図



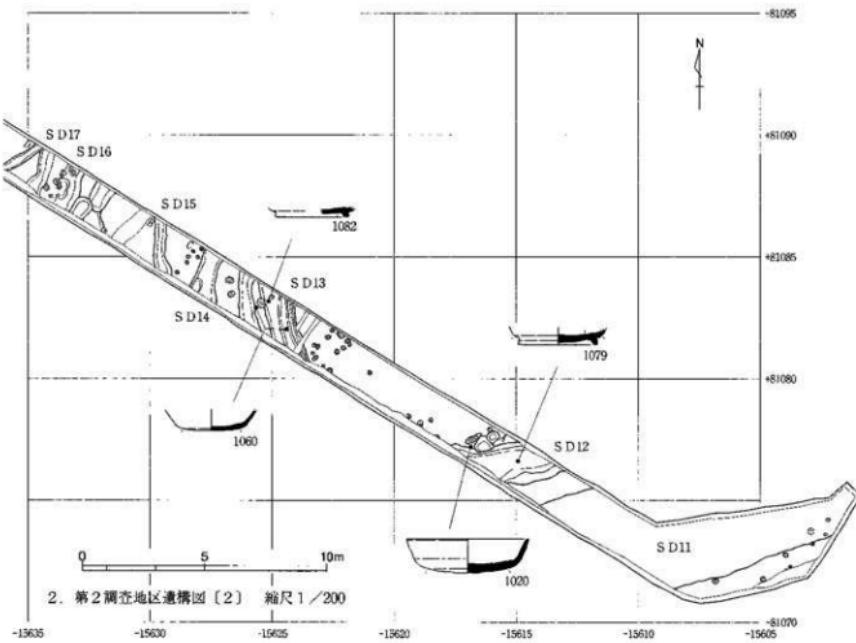
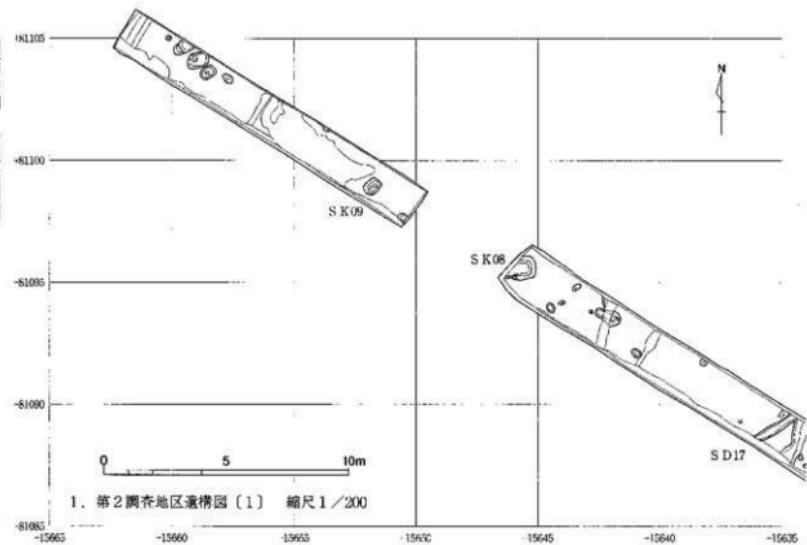
遺構実測図 110面図



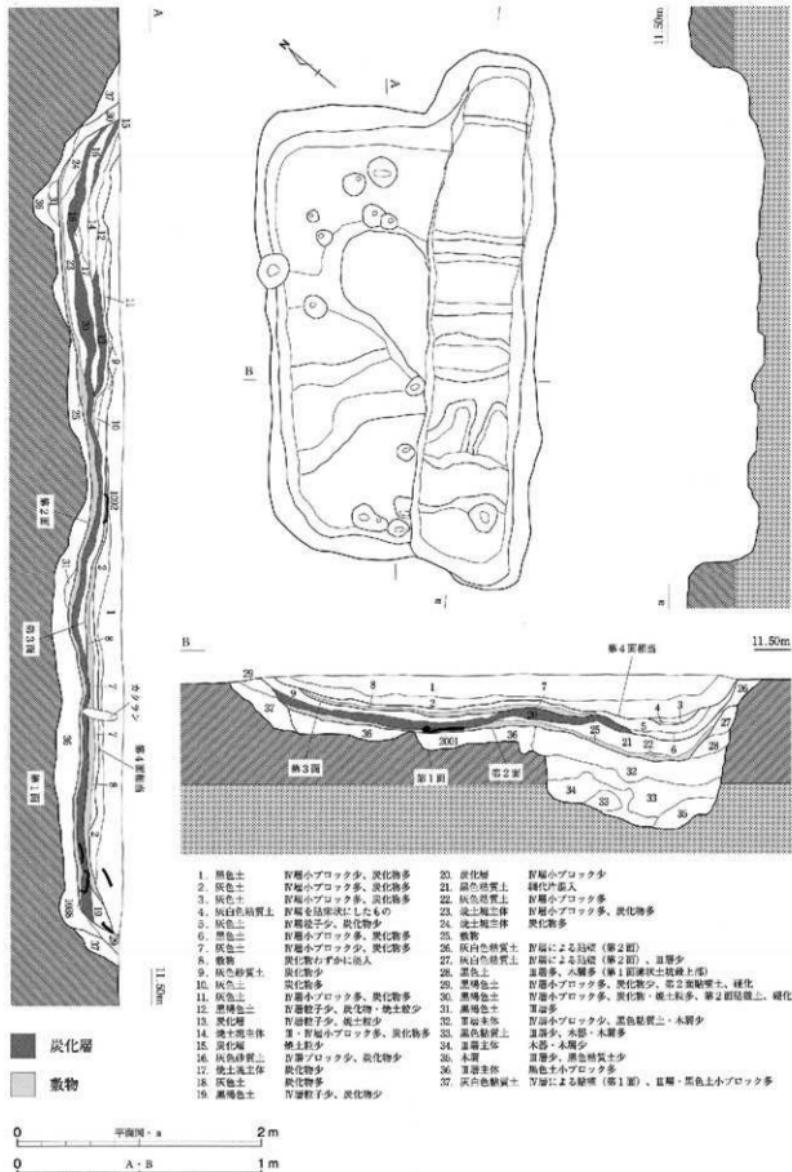
図面〇〇 遺構実測図



図面〇四
遺構実測図



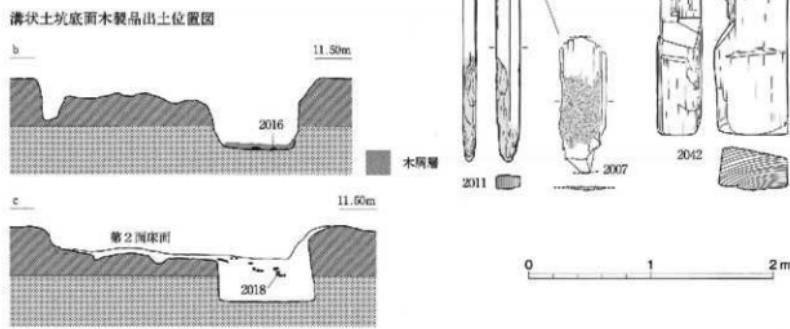
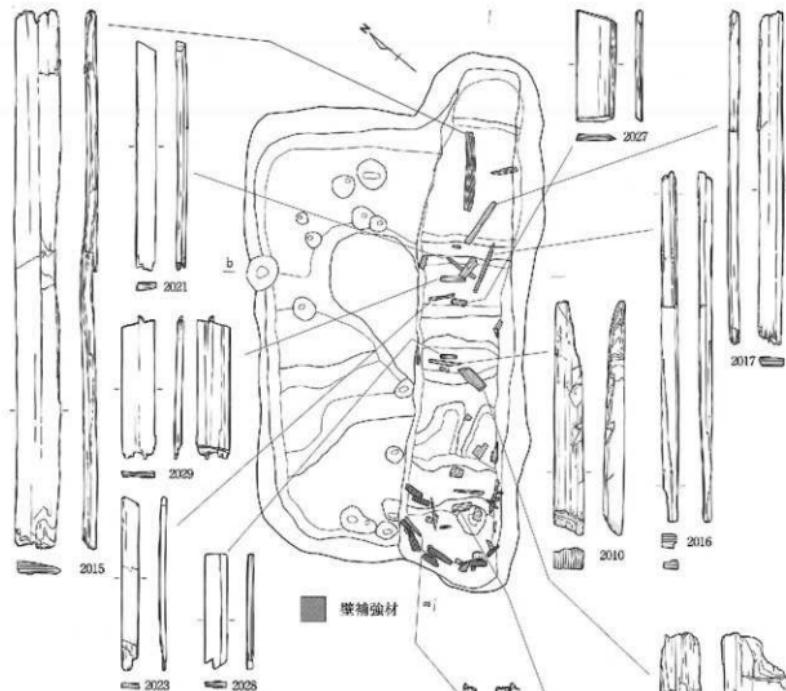
図面〇五 遺構実測図



堅穴建物址 S 101 第1面実測図 [1]

縮尺 1/40、1/20

図面〇六 遺構実測図



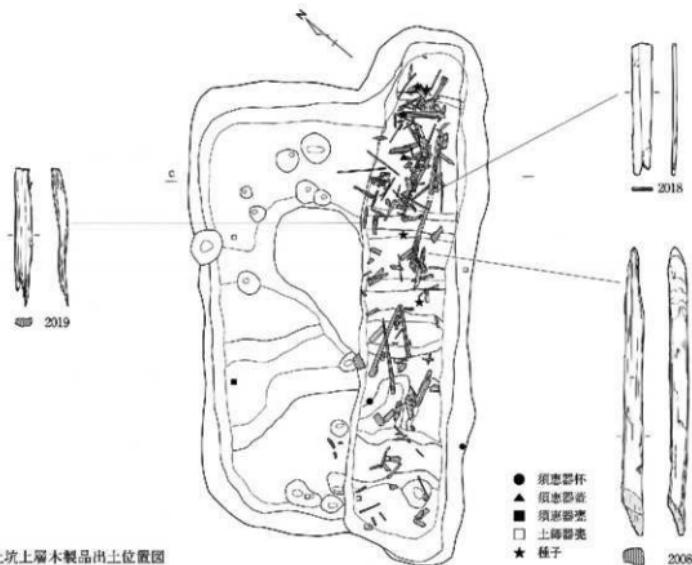
堅穴建物址 S 101第1面実測図〔2〕

縮尺 1/40



溝状土坑下層（木屑層）木製品出土位置図

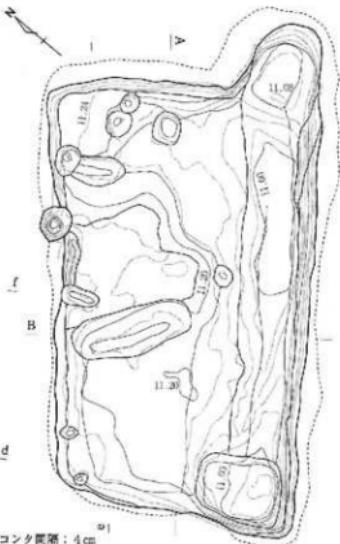
★ 種子



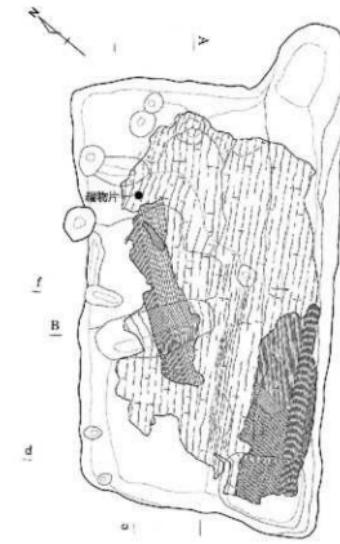
溝状土坑上層木製品出土位置図

0 1 2m
縮尺 1/40

図面〇八
遺構実測図

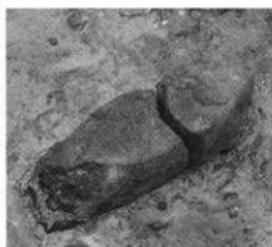
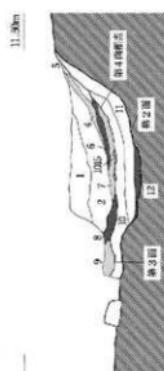
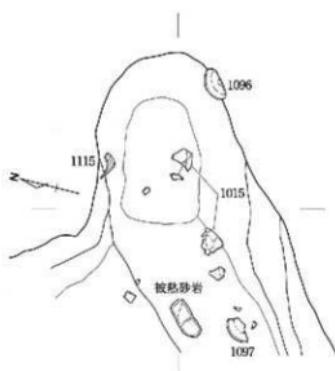


平面図(破線は第1面プラン)



断面図

0 1 2 m



被熱砂岩出土状態



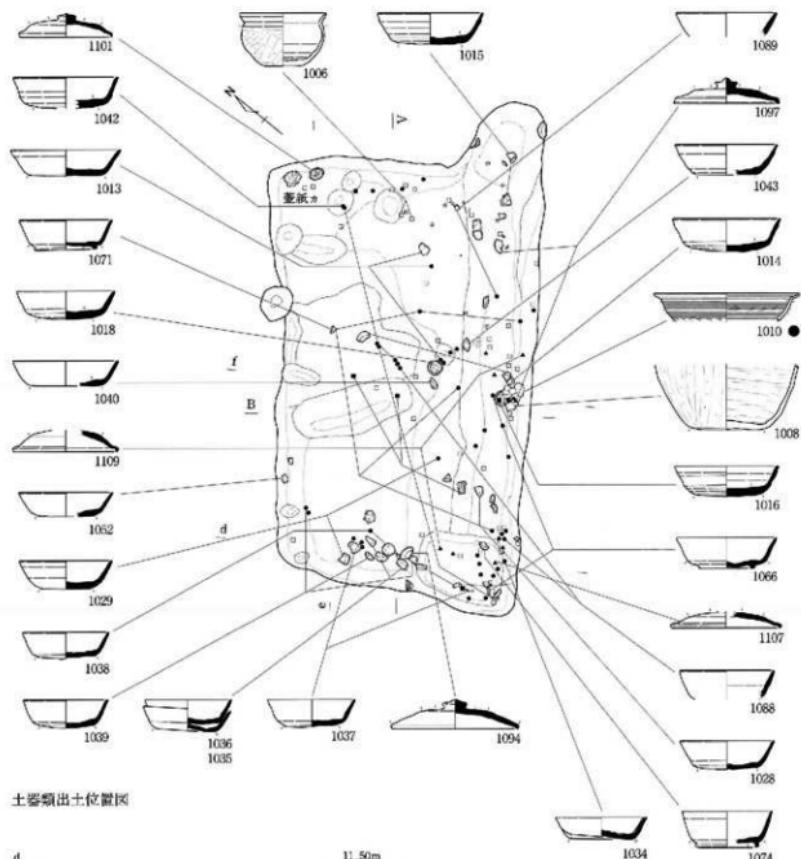
カマド状施設

0 1 m

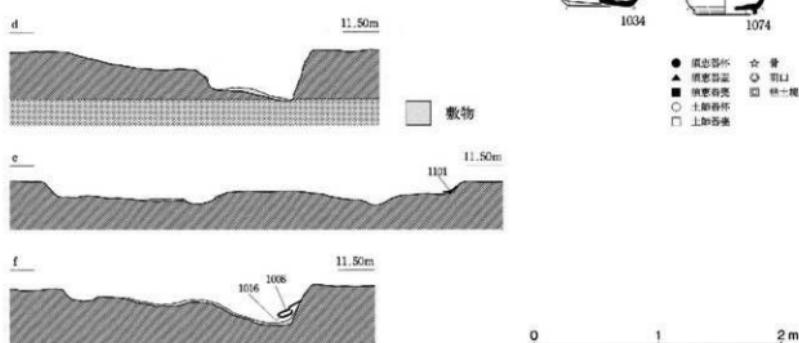
縮尺 1/40、1/20

堅穴建物址 S 101第2面実測図〔1〕

図面〇九 遺構実測図

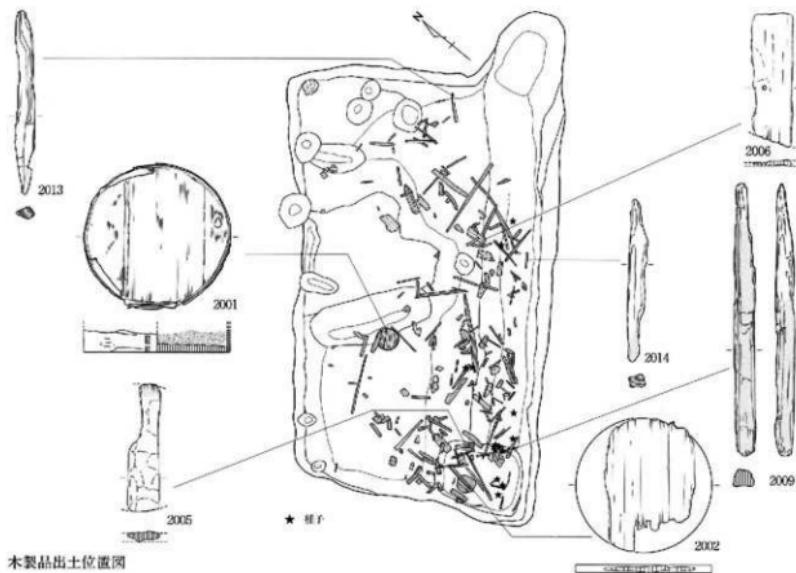


土器類出土位置図



堅穴建物址 S I 01第2面実測図〔2〕

図面一〇 遺構実測図

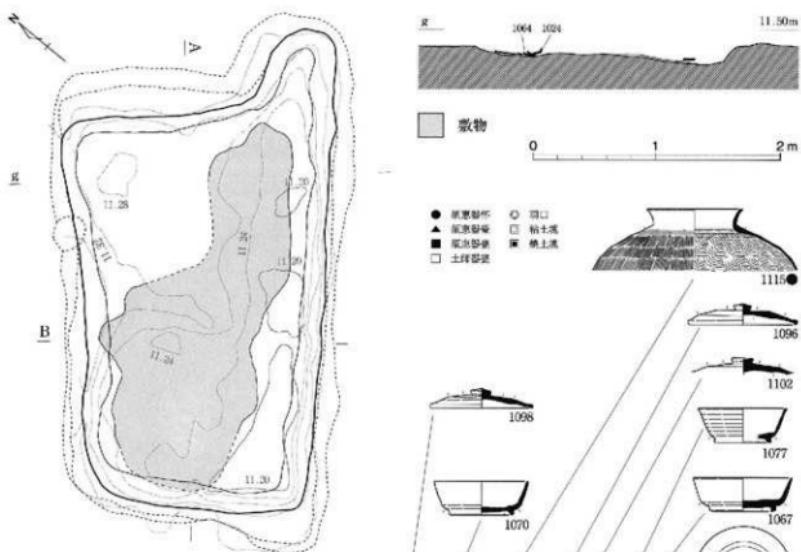


木製品出土位置図

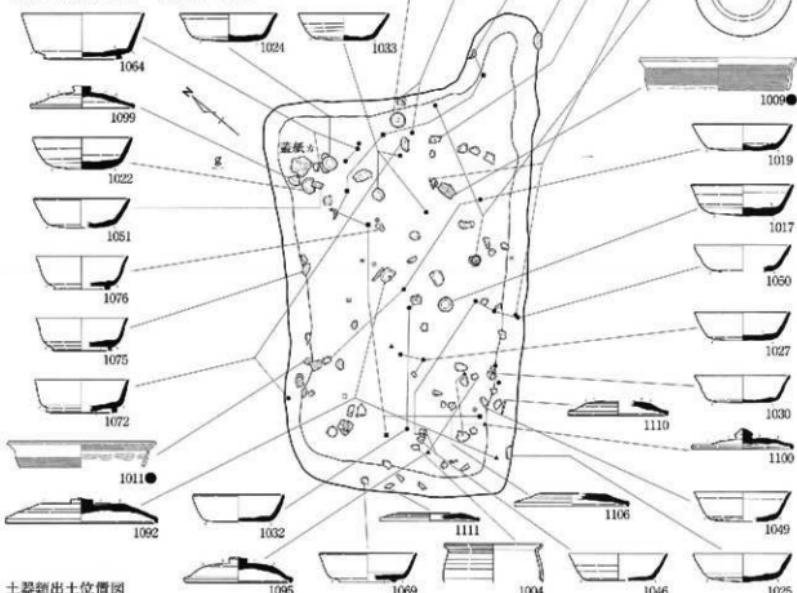


0 1 2m
縮尺 1/40

図面一
遺構実測図



平面図(破線は第1・第2面プラン)

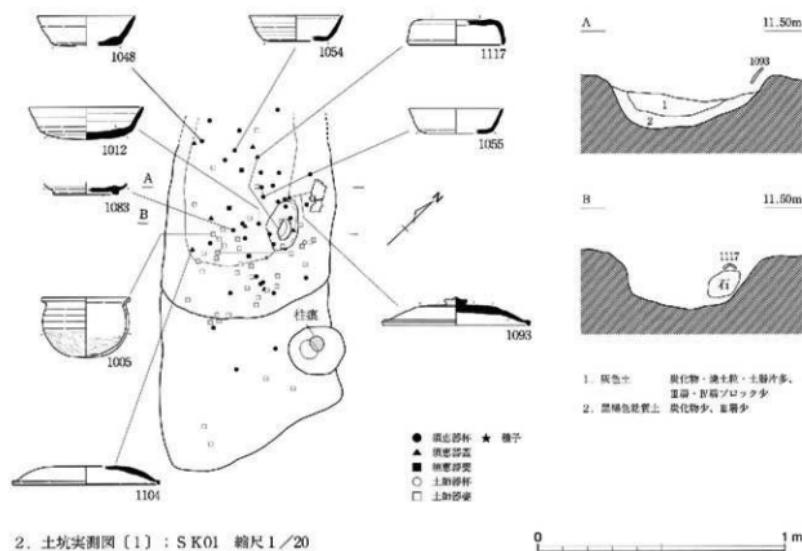
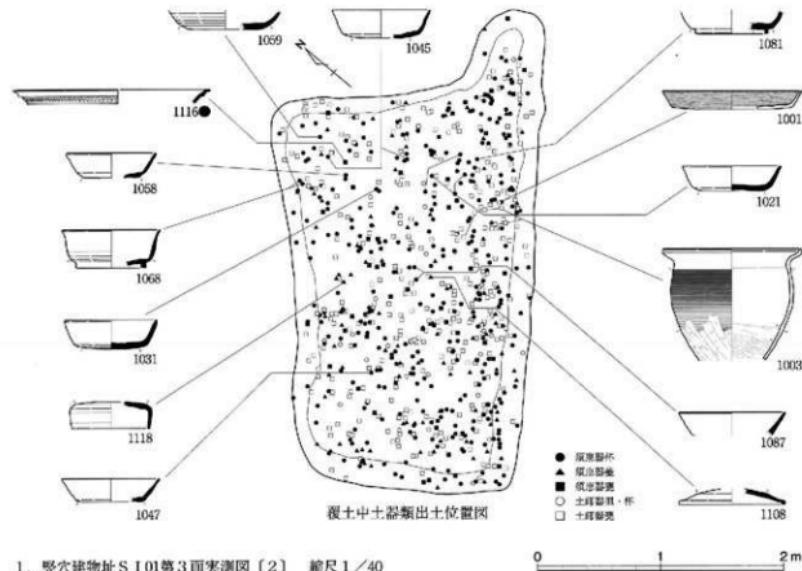


土器類出土位置図

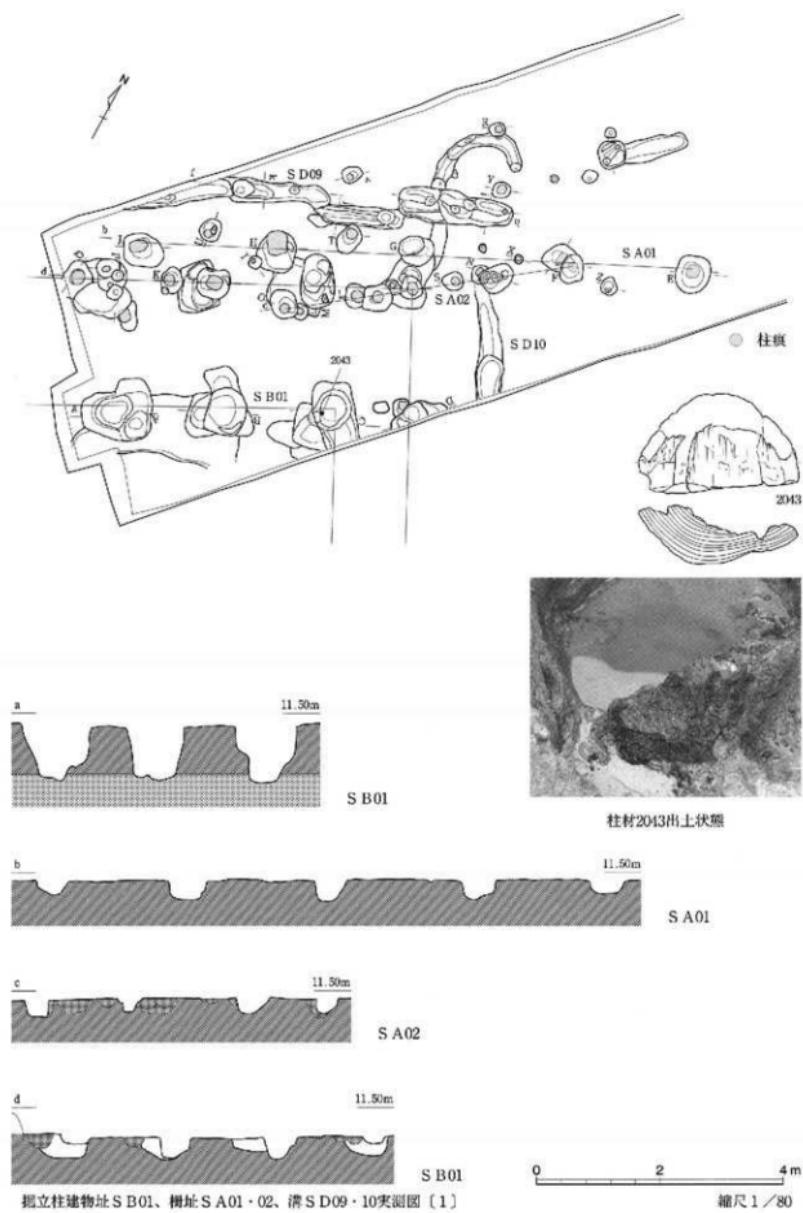
堅穴建物址 S I 01第3面実測図〔1〕

縮尺 1/40

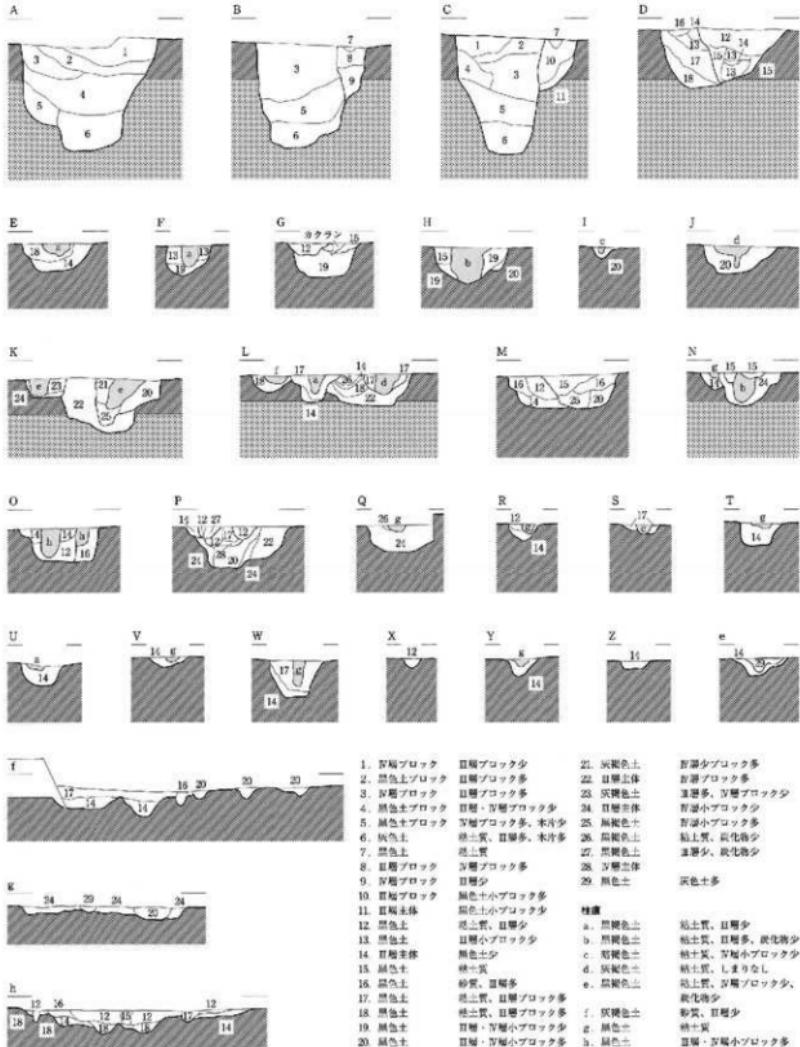
図面二
遺構実測図



図面三 造構実測図



四面一四 遺構実測図

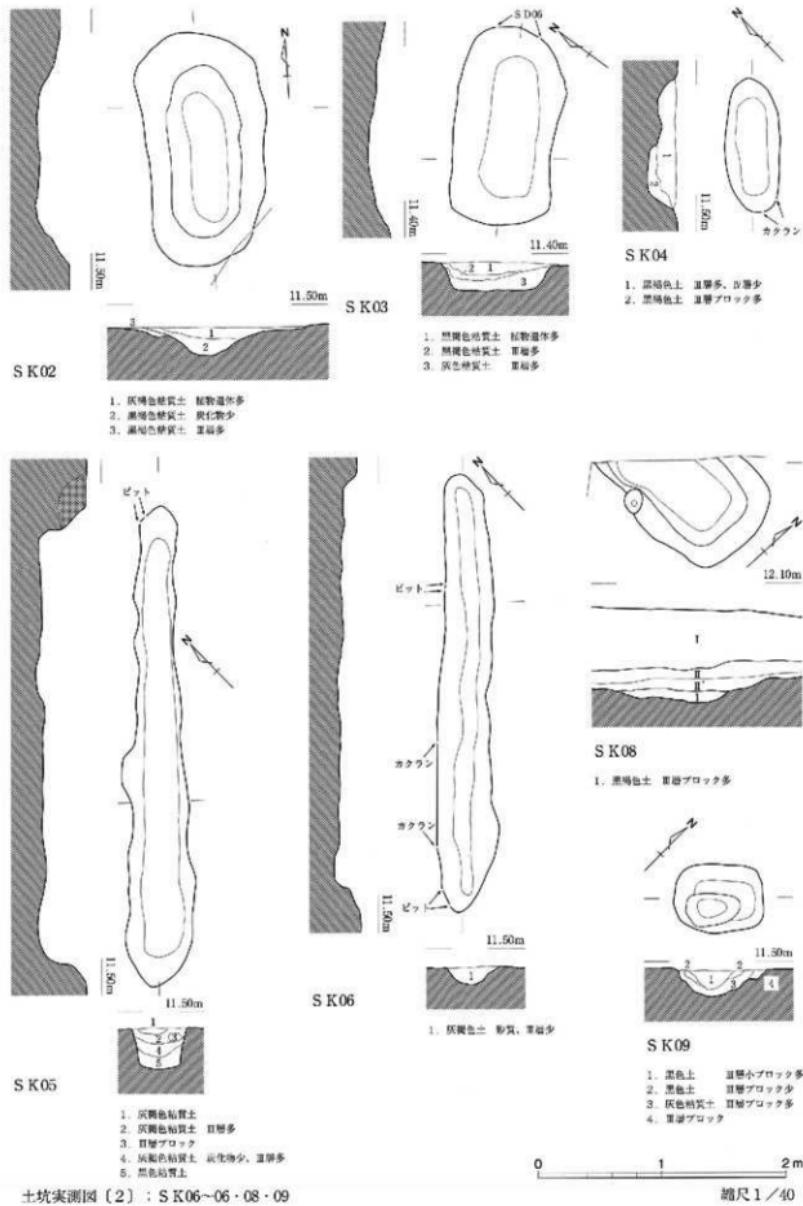


掘立柱建物址 S B01実測図(2)

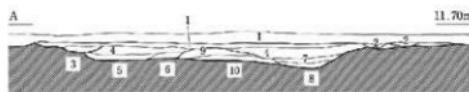
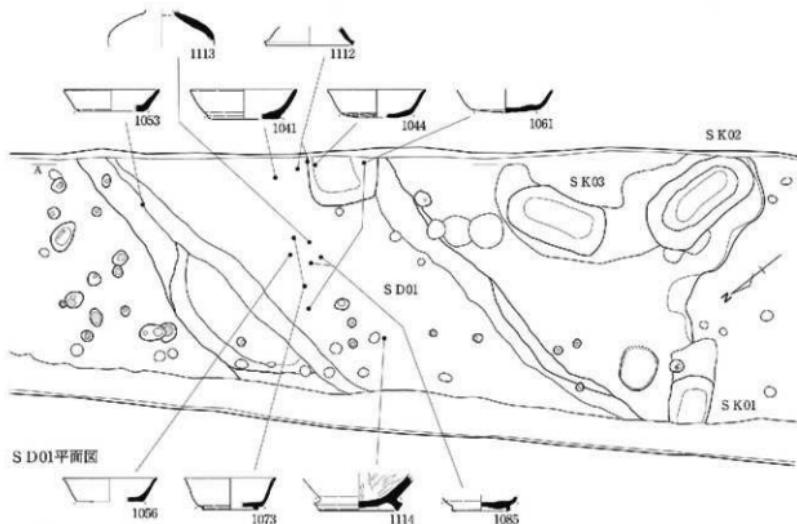
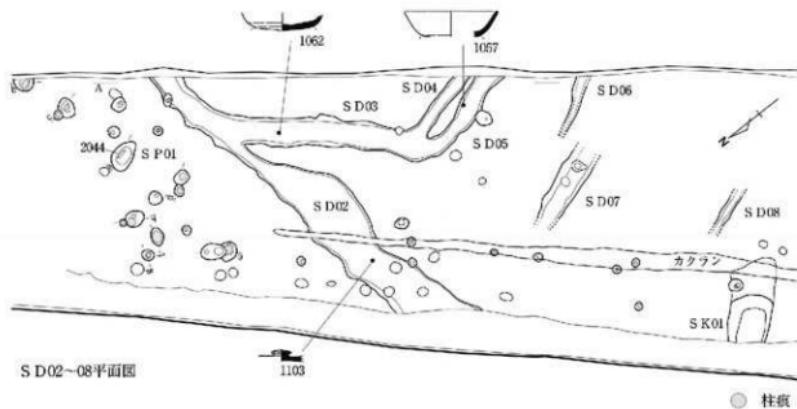
断面基準線の標高は11.50mである。

A horizontal scale bar starting at 0 and ending at 2 m. The distance between 0 and 2 m is divided into four equal segments by tick marks. Below the scale bar, the text "縮尺 1 / 40" is written.

図面一五 遺構実測図



図面一六 遺構実測図



1. 黒色粘土 植物遺体多、炭化物・土器片多
2. 黑褐色粘土 炭化物多、小石片多 [SD04・05]
3. 黄褐色粘土 炭化物多、土器片多 [SD02]
4. 黑色粘土 植物遺体多、鉢分化者
5. 黑色粘土 植物遺体少、玉器多
6. 底場色粘土 直管形子多
7. 黑色粘土 斧削小ブロック多
8. 黑褐色粘土 植物遺体少、黑色土小ブロック多
9. 底場色粘土 鉢分化者
10. 淡色粘土 植物遺体少、瓦器・瓦屋小ブロック多

0 2 4 m

第1調査地区溝実測図：S D01~08

縮尺 1/80

図面一七 遺構実測図



- | | | |
|-----------|----------------|------------------|
| 1. 黒色粘質土 | Ⅲ層少 | 柱狀 |
| 2. Ⅲ層土体 | 黒褐色土小ブロック多 | a. 黒色粘質土 |
| 3. 黑褐色土 | Ⅲ層多 | b. 混合色粘質土 |
| 4. Ⅲ層主体 | Ⅲ層小ブロック多、黒褐色土多 | c. 黒褐色粘質土 |
| 5. Ⅲ層半体 | 黒褐色土少 | d. 黒褐色土 Ⅲ層小ブロック少 |
| 6. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層多 | |
| 7. Ⅲ層主体 | | |

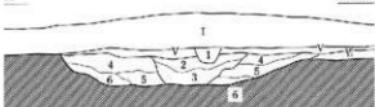
断面基準線の標高は11.50m

1. 第1調査地区ピット土層断面図 縮尺1/40



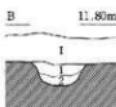
A

11.80m



S D12

- | | | | |
|-----------|----------------|----------|--------|
| 1. 黒色粘質土 | Ⅲ層少 | V. 黒色粘質土 | Ⅲ層少 |
| 2. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層小ブロック多 | VI. Ⅲ層主体 | 黒色粘質土少 |
| 3. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層多 | | |
| 4. 黄褐色粘質土 | Ⅲ層少、黒褐色土小ブロック少 | | |
| 5. 黄褐色粘質土 | Ⅲ層多 | | |
| 6. Ⅲ層主体 | | | |



S D15

- | | |
|----------|------|
| 1. 黒色粘質土 | Ⅲ層多 |
| 2. Ⅲ層主体 | 黒色土少 |

C

11.80m

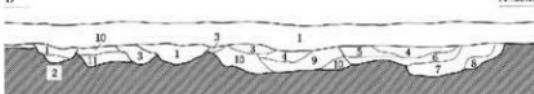


S D13・14

- | | | | |
|-----------|---------|----------|---------|
| 1. 黒色粘質土 | Ⅲ層多 | 6. 黑褐色土 | |
| 2. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層少 | 7. Ⅲ層主体 | |
| 3. Ⅲ層 | | | |
| 4. 黄褐色粘質土 | Ⅲ層少、小石少 | 8. Ⅲ層主体 | 黒色土多 |
| 5. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層少 | 9. 黑褐色土 | |
| | | 10. 黑褐色土 | Ⅲ層ブロック多 |

D

11.50m



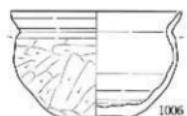
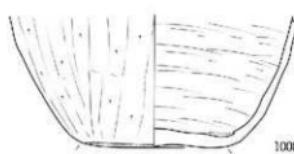
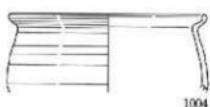
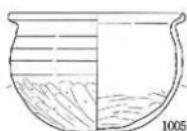
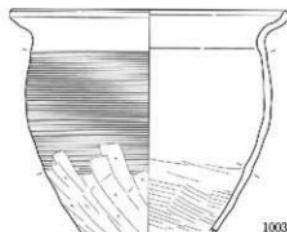
S D16・17

- | | | | |
|-----------|-----------|----------|---------------|
| 1. 黒色粘質土 | Ⅲ層ブロック少 | 7. Ⅲ層土体 | Ⅲ層多、黒色土小ブロック多 |
| 2. Ⅲ層土体 | 黒褐色土少 | 8. Ⅲ層主体 | |
| 3. 黑褐色粘質土 | Ⅲ層多 | 9. 黑褐色土 | Ⅲ層多 |
| 4. 黄褐色粘質土 | Ⅲ層少、灰褐色土少 | 10. Ⅲ層土体 | 黒褐色土少 |
| 5. 灰褐色土 | 小石少 | 11. Ⅲ層主体 | 黒褐色土多 |
| 6. Ⅲ層土体 | 粗砂・小石少 | | |

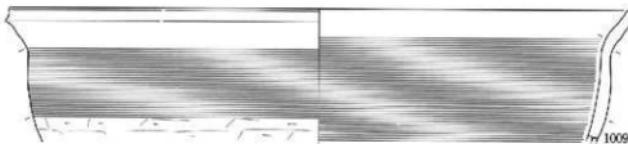
2. 第2調査地区溝土層断面図：S D12～17 縮尺1/40



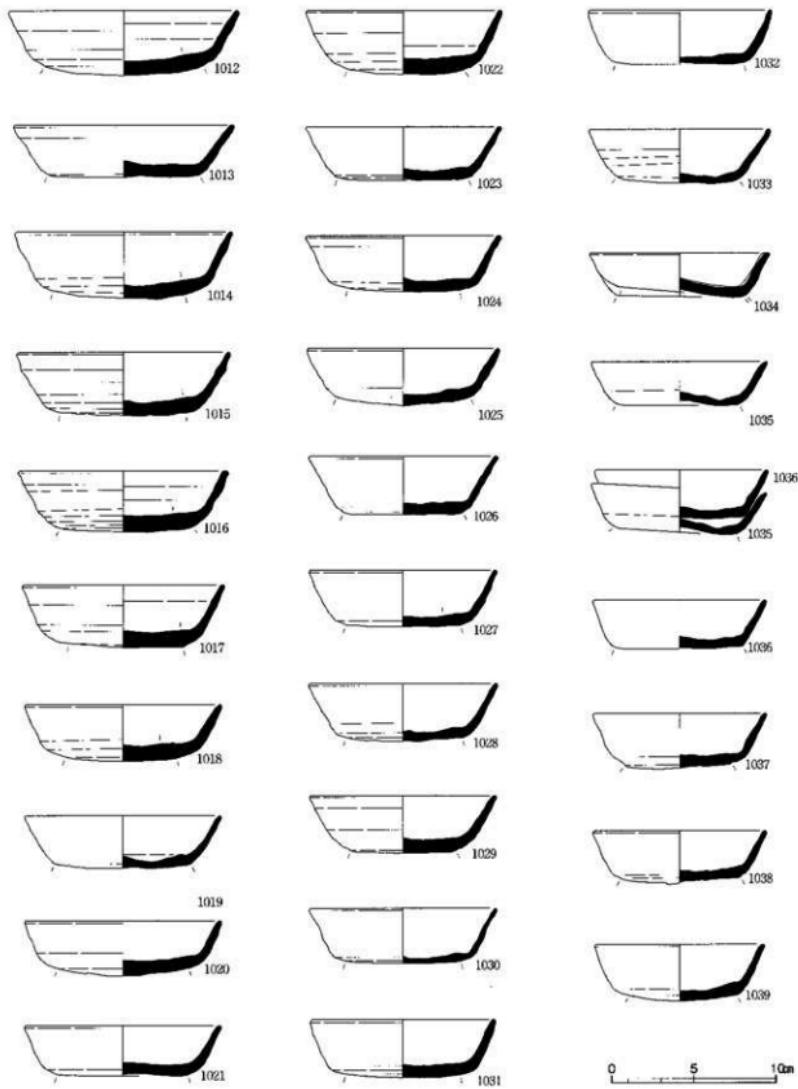
圖一八 遺物実測図



0 5 10cm



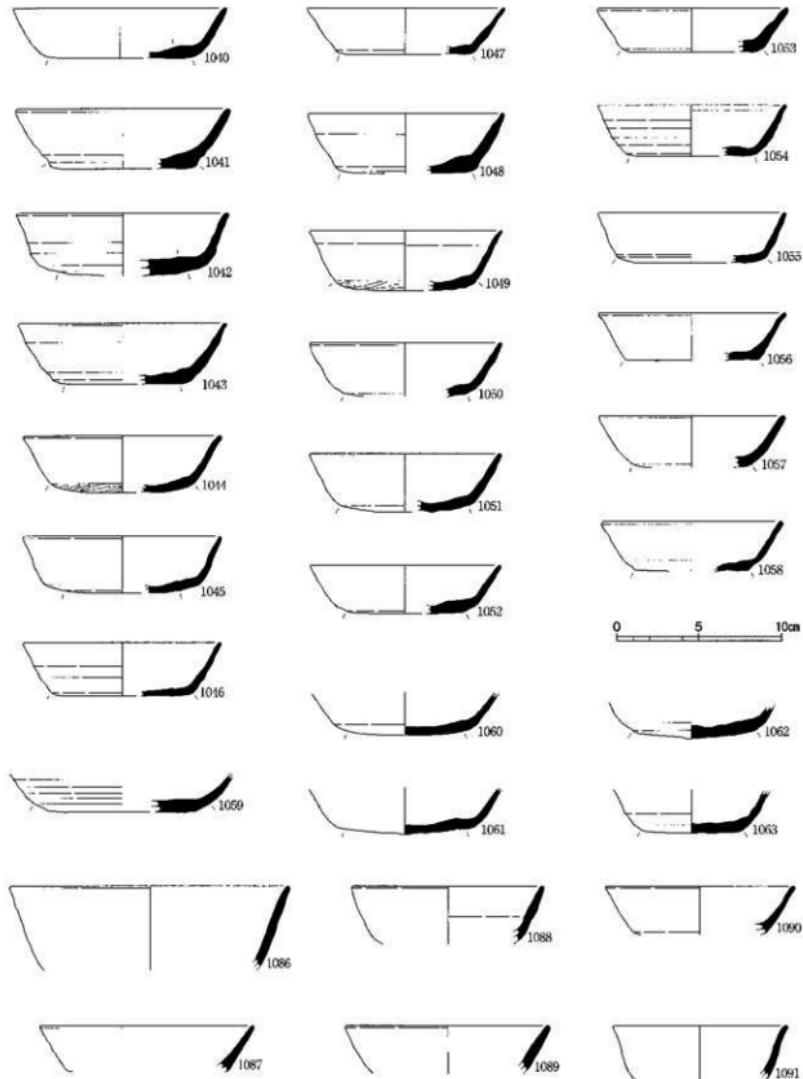
圖面一九 遺物実測図

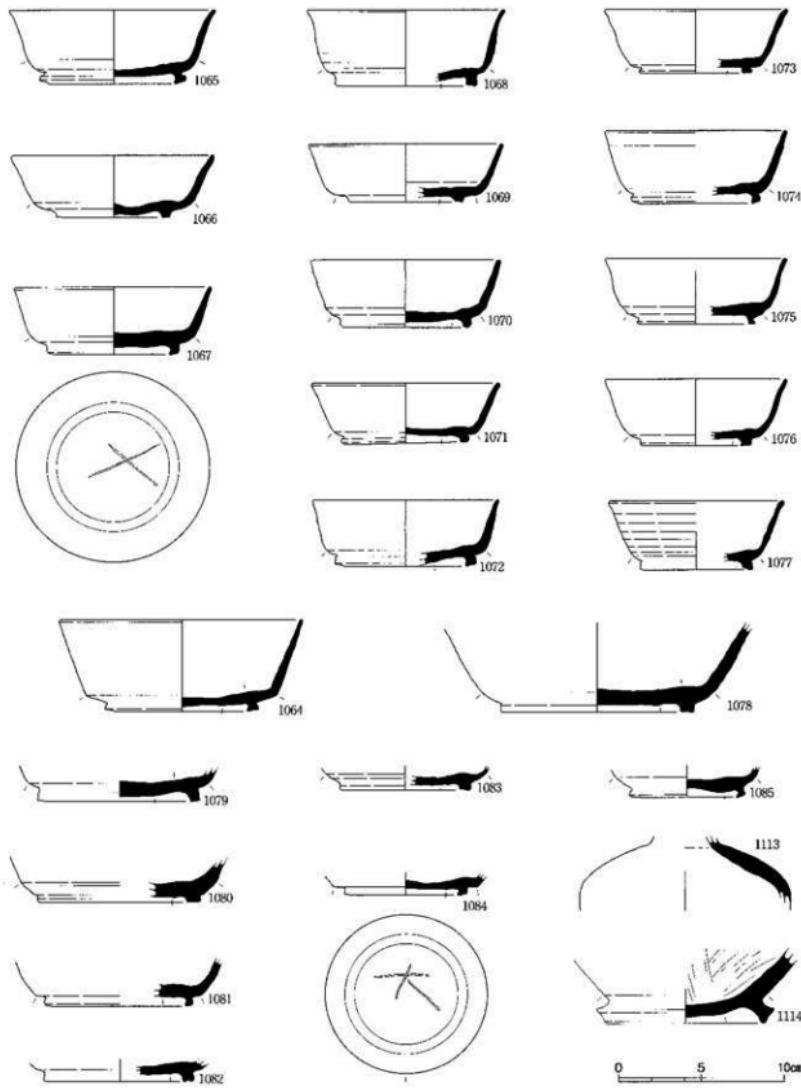


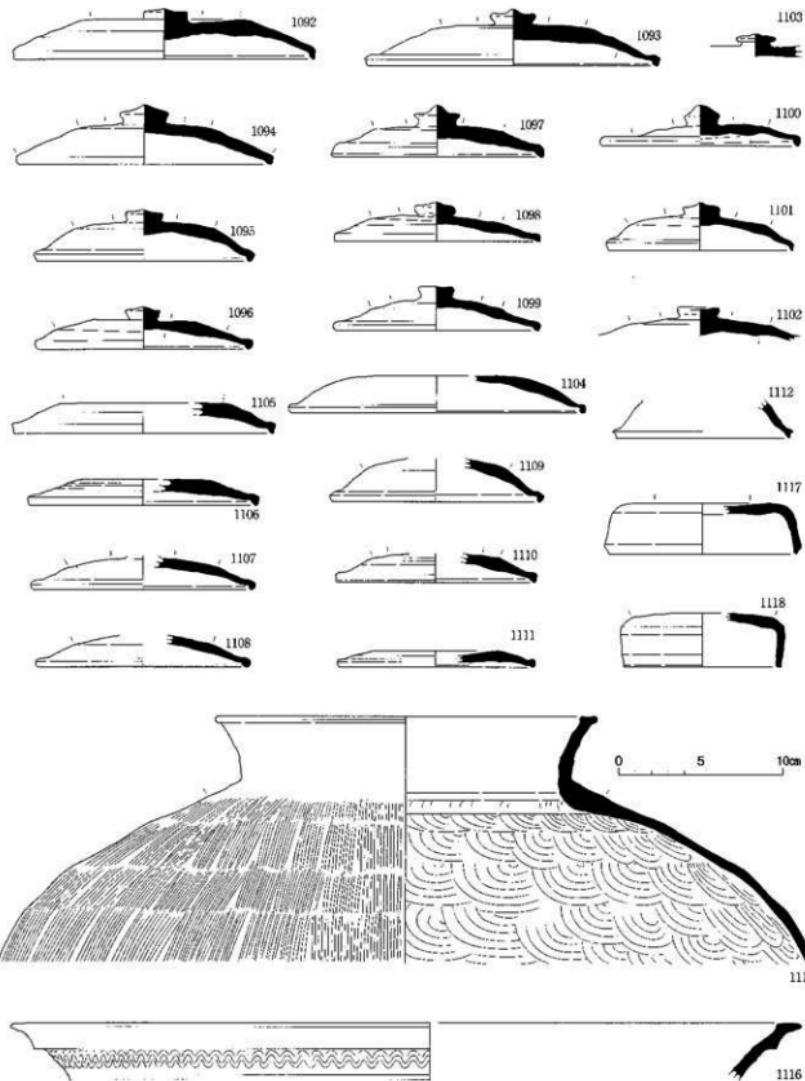
土器類

須志器

縮尺 1/3



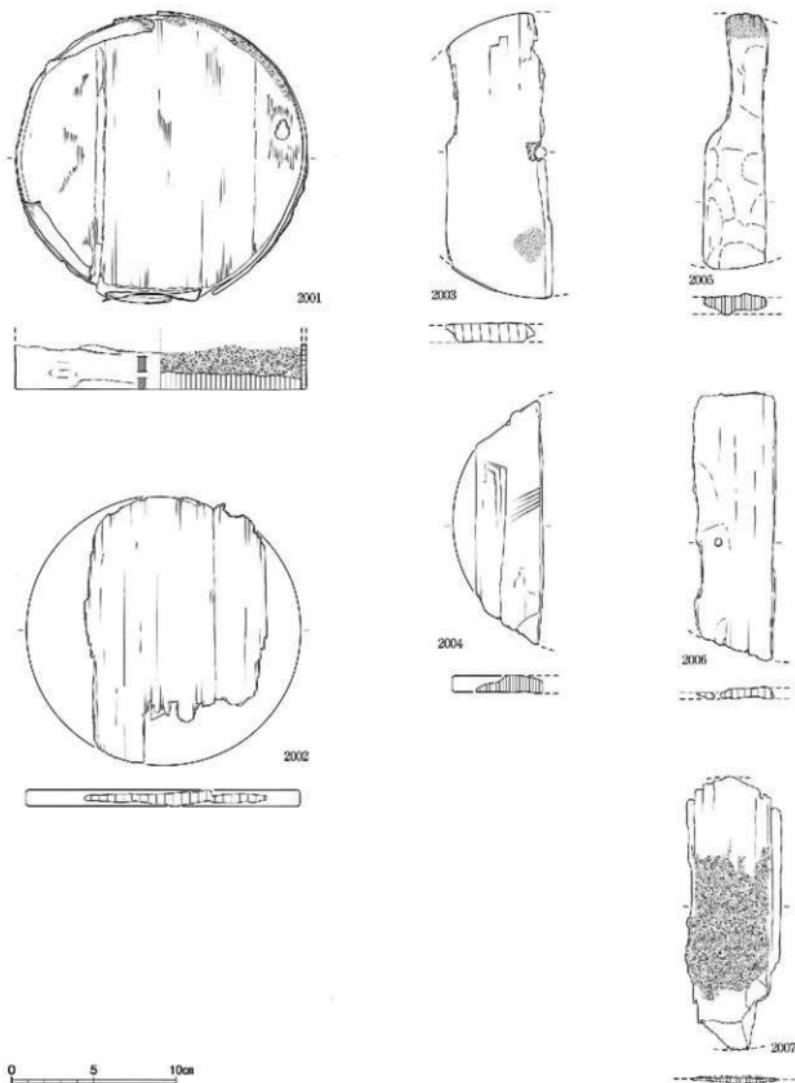




土器類
須恵器

縮尺 1 / 3

図一三 遺物実測図

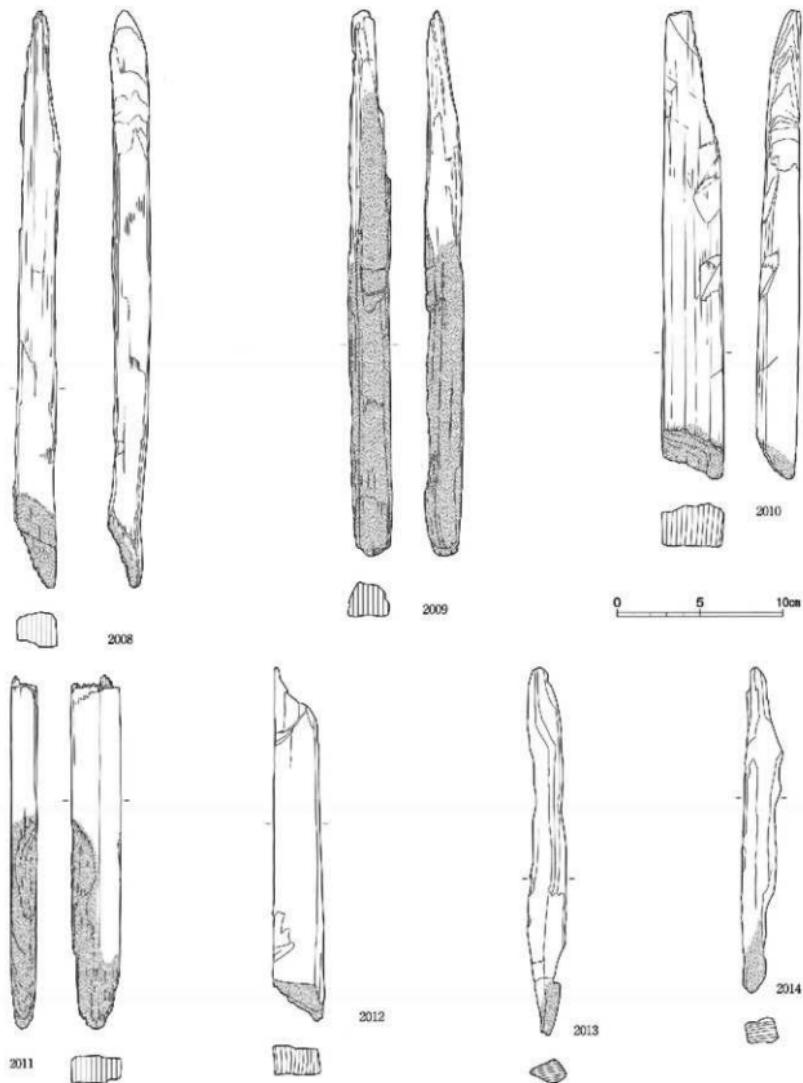


木製品

遺物容器

縮尺 1 / 3

図面二四
遺物実測図

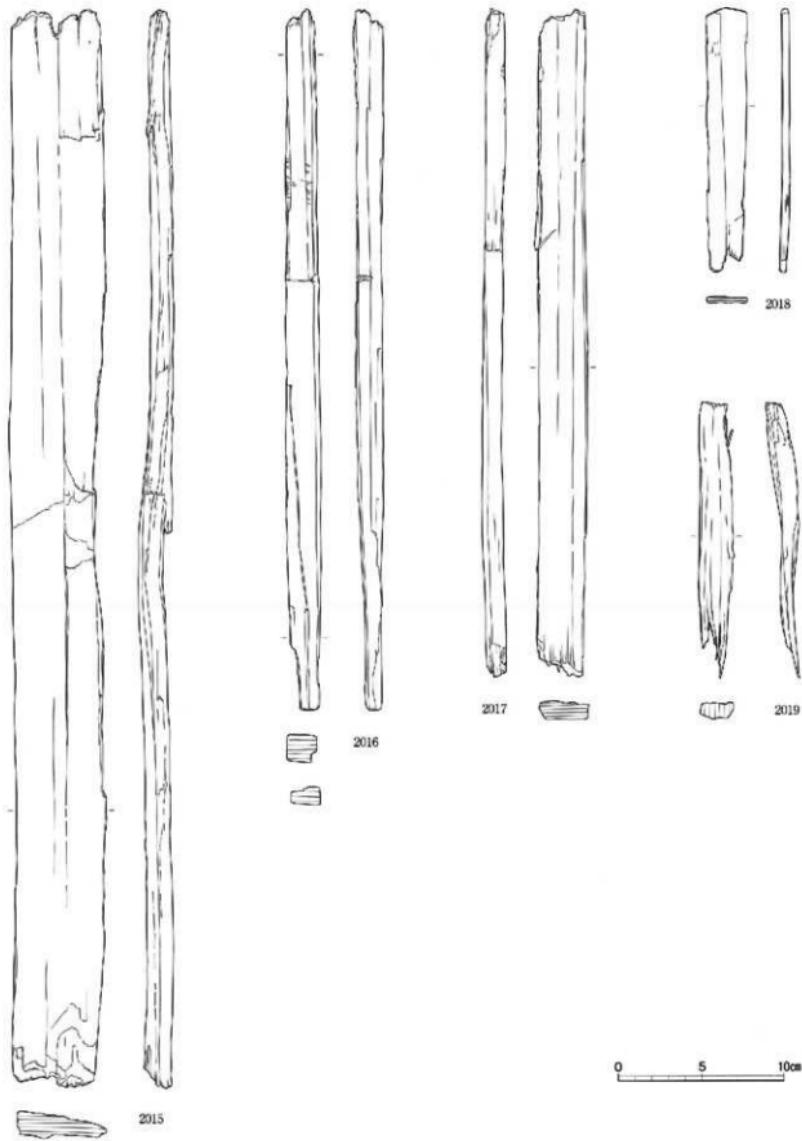


木製品

端部炭化棒状品

縮尺1/3

図面二五 遺物実測図

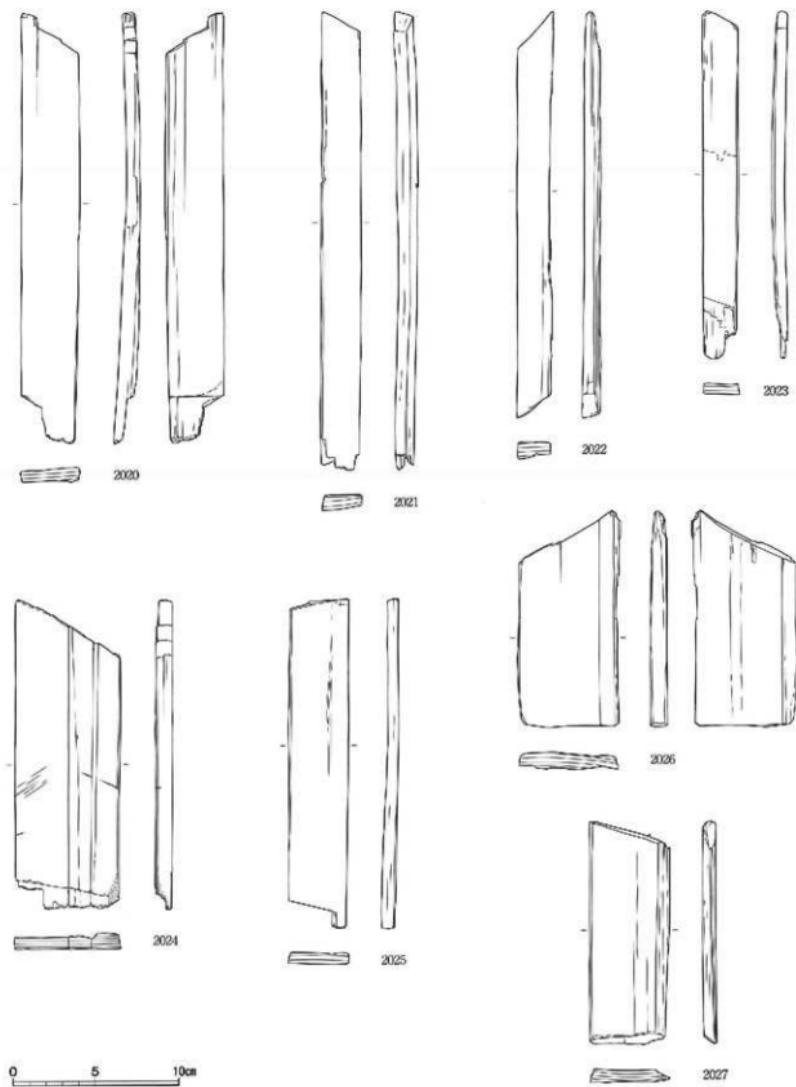


木製品

板状素材: 2015~2017, 板状加工木: 2018・2019

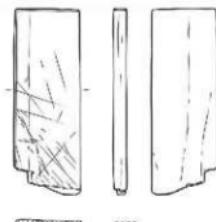
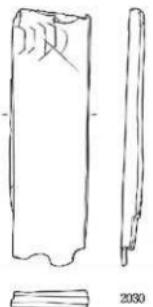
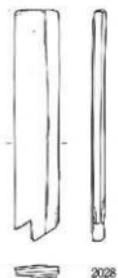
縮尺 1/3

図面二六 遺物実測図

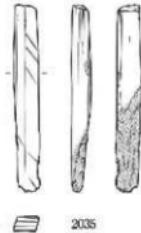
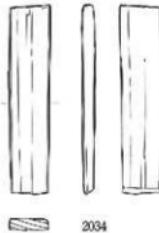


木製品
板状加工木

縮尺 1 / 3



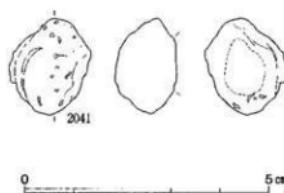
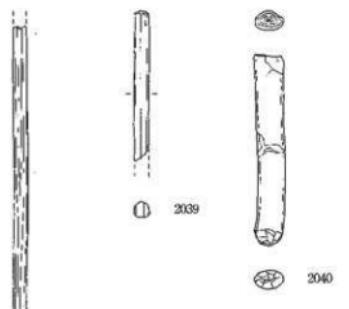
0 5 10cm



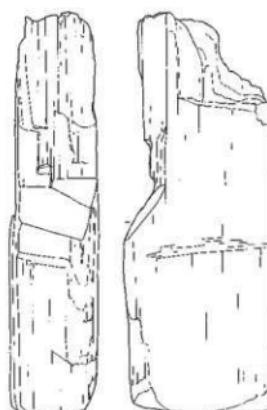
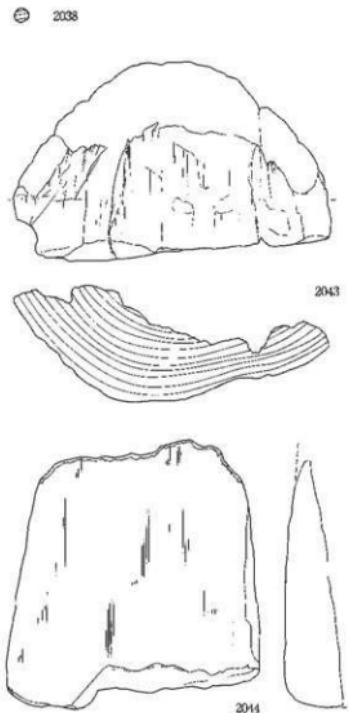
木製品

板状加工木：2028～2036、管：2037

縮尺 1 / 3



0 5cm



0 5 10cm

木製品

縮尺1/3、実大

棒状加工木：2038～2040、モモ核：2041、直方体原木：2042、柱材：2043・2044

図 版

図版目次

- 図版01 遺構写真 1. 遺跡全景（南）
2. 第1調査地区全景（南東）
- 図版02 遺構写真 1. 第2調査地区全景（南西）
2. 第1調査地区南西部近景（北東）
- 図版03 遺構写真 1. 壴穴建物址 S I 01第1面全景（南西）
2. 壴穴建物址 S I 01第2面企景（南西）
- 図版04 遺構写真 1. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑、遺物出土状態（北東）
2. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑、遺物出土状態（北東）
3. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑南西隅、遺物出土状態（北東）
4. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑南西隅、木屑層検出状態（北東）
5. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑北東部上層、遺物出土状態（南西）
6. 壴穴建物址 S I 01第1面溝状土坑南西部上層、遺物出土状態（北）
- 図版05 遺構写真 1. 壴穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態（南西）
2. 壴穴建物址 S I 01第2面南西部企景（北東）
- 図版06 遺構写真 1. 壴穴建物址 S I 01第2面炭化材検出状態（南西）
2. 壴穴建物址 S I 01第2面散物検出状態（内）
3. 壴穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、土師器壺・須恵器杯（南）
4. 壴穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、須恵器杯蓋（南西）
5. 壴穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、曲物容器（南東）
6. 壴穴建物址 S I 01第2面貯藏穴状土坑遺物出土状態、曲物容器（南西）
- 図版07 遺構写真 1. 壴穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態（南西）
2. 壴穴建物址 S I 01第3面カマド状施設検出状態（南西）
3. 壴穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態、須恵器杯（北西）
4. 壴穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態（南東）
5. 土坑 S K 01遺物出土状態（南東）
6. 溝 S D 01全景（西）
- 図版08 遺構写真 1. 据立柱建物址 S B 01全景（北東）
2. 据立柱建物址 S B 01全景（南東）
- 図版09 遺物写真 上器類 瓦器器
- 図版10 遺物写真 木製品 曲物容器・端部炭化棒状品
- 図版11 遺物写真 木製品 板状素材・板状加工木
- 図版12 遺物写真 木製品 板状加工木・轡・棒状加工木・直方体原木・柱材・モモ核

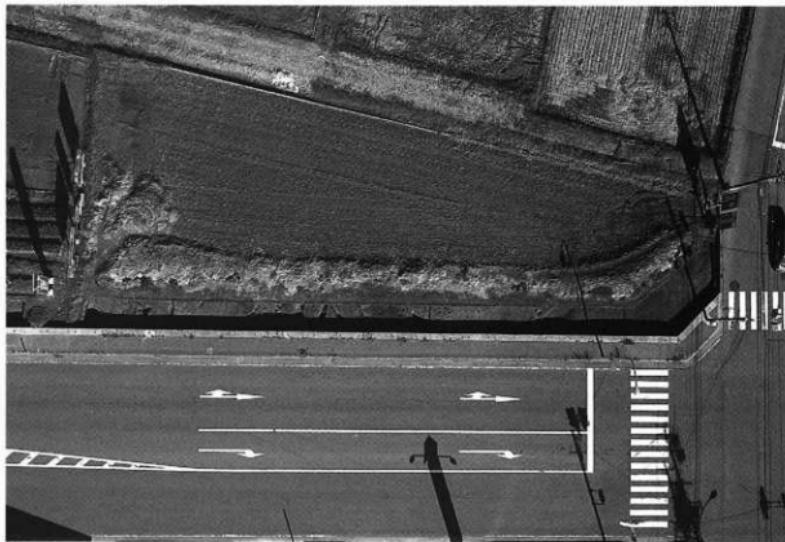


1. 連跡遠景（南）



2. 第1調査地区全景（南東）

図版〇一
遺構写真



1. 第2調査地区全景（南西）



2. 第1調査地区南西部近景（北京）



1. 壴穴建物址 S 101第1面全景（南西）



2. 壴穴建物址 S 101第2面全景（南西）



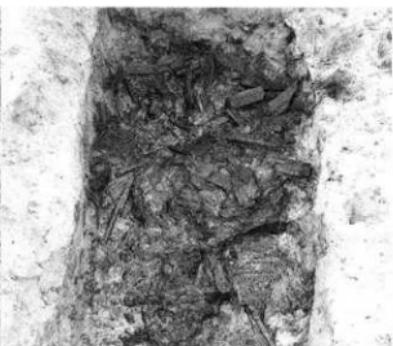
1. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑、
遺物出土状態（北東）



2. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑、
遺物出土状態（北東）



3. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑南西窓、
遺物出土状態（北東）



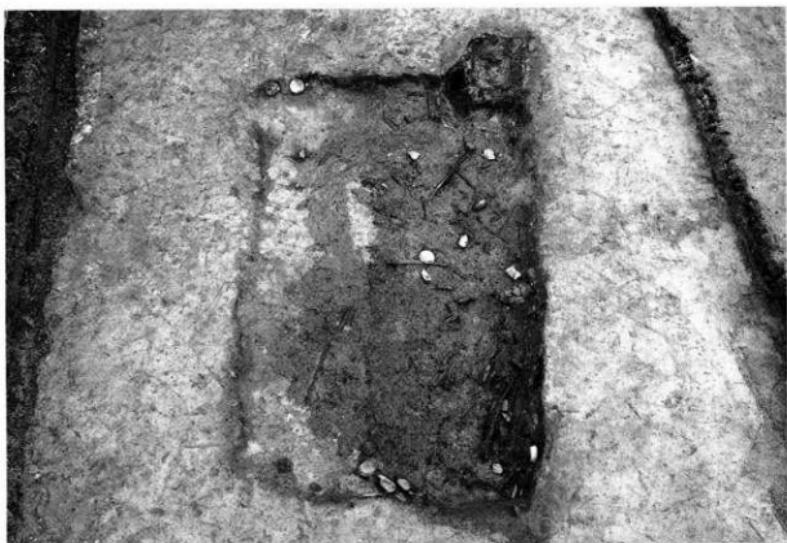
4. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑南西窓、
木屑層検出状態（北東）



5. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑北東部上層、
遺物出土状態（南西）



6. 壺穴建物址 S I 01第 1 面溝状土坑南西部上層、
遺物出土状態（北）



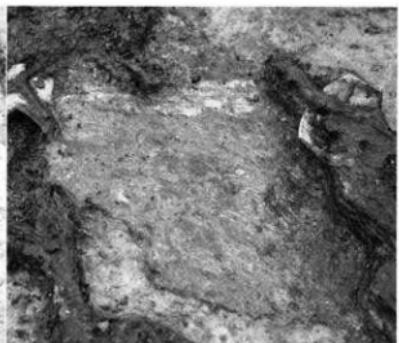
1. 壓穴建物址 S 101第2面遺物出土状態（南西）



2. 壓穴建物址 S 101第2面南西部全景（北東）



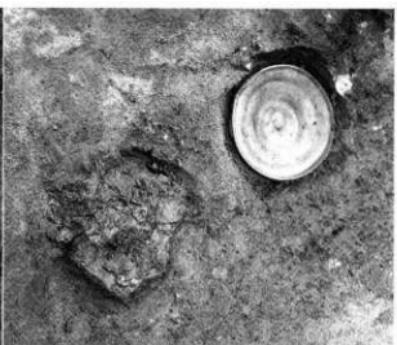
1. 壅穴建物址 S I 01第2面炭化材検出状態 (南西)



2. 壅穴建物址 S I 01第2面敷物検出状態 (西)



3. 壟穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、
土師器甕・須恵器杯 (南)



4. 壟穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、
須恵器杯蓋 (南西)



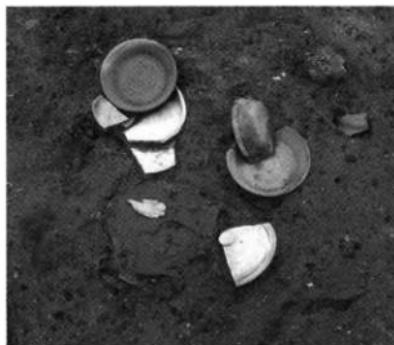
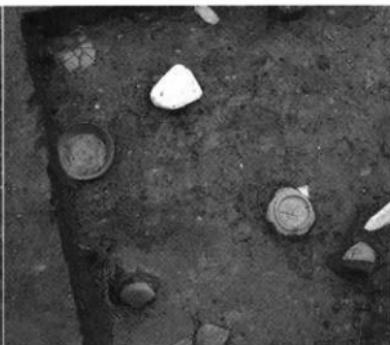
5. 壟穴建物址 S I 01第2面遺物出土状態、
曲物容器 (南東)



6. 壟穴建物址 S I 01第2面貯藏穴状土坑遺物出土状態、
曲物容器 (南西)



1. 壺穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態（南西）

2. 壺穴建物址 S I 01第3面カマド状施設検出状態
(南西)3. 壺穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態、
須恵器片（北西）

4. 壺穴建物址 S I 01第3面遺物出土状態（南東）



5. 土坑 S K 01遺物出土状態（南東）



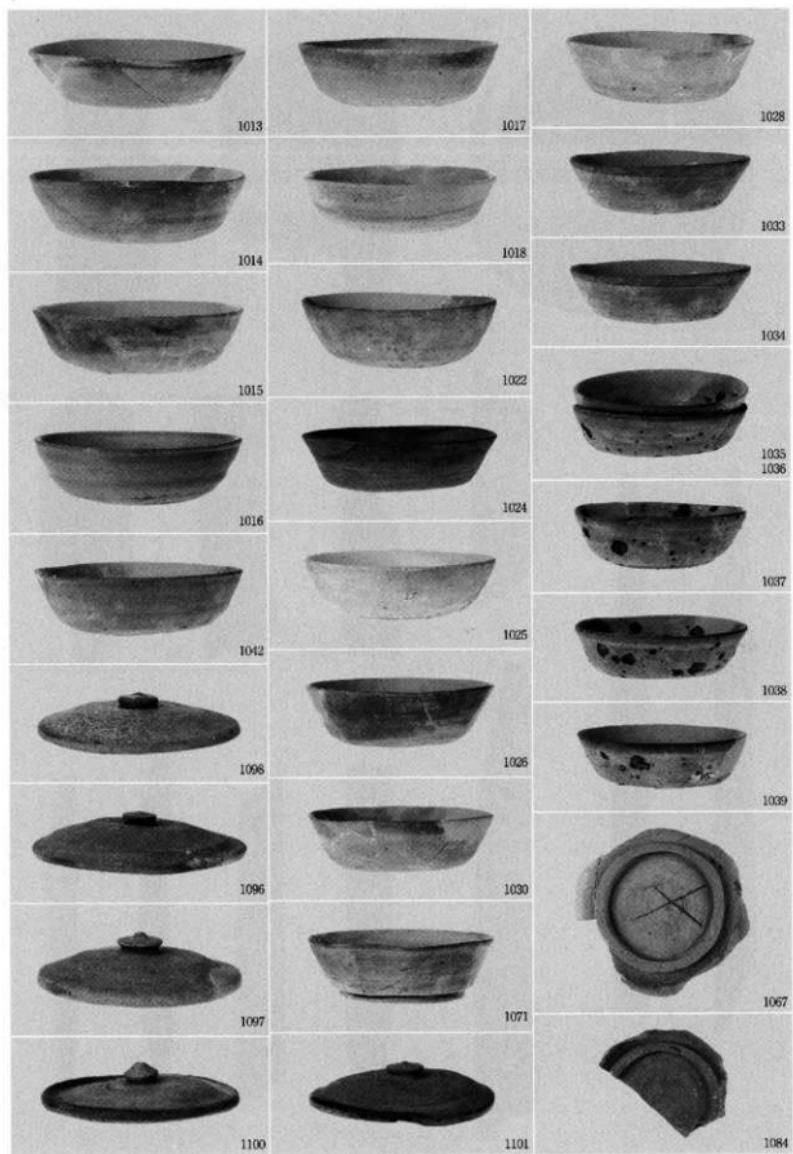
6. 潟 S D 01全景（西）



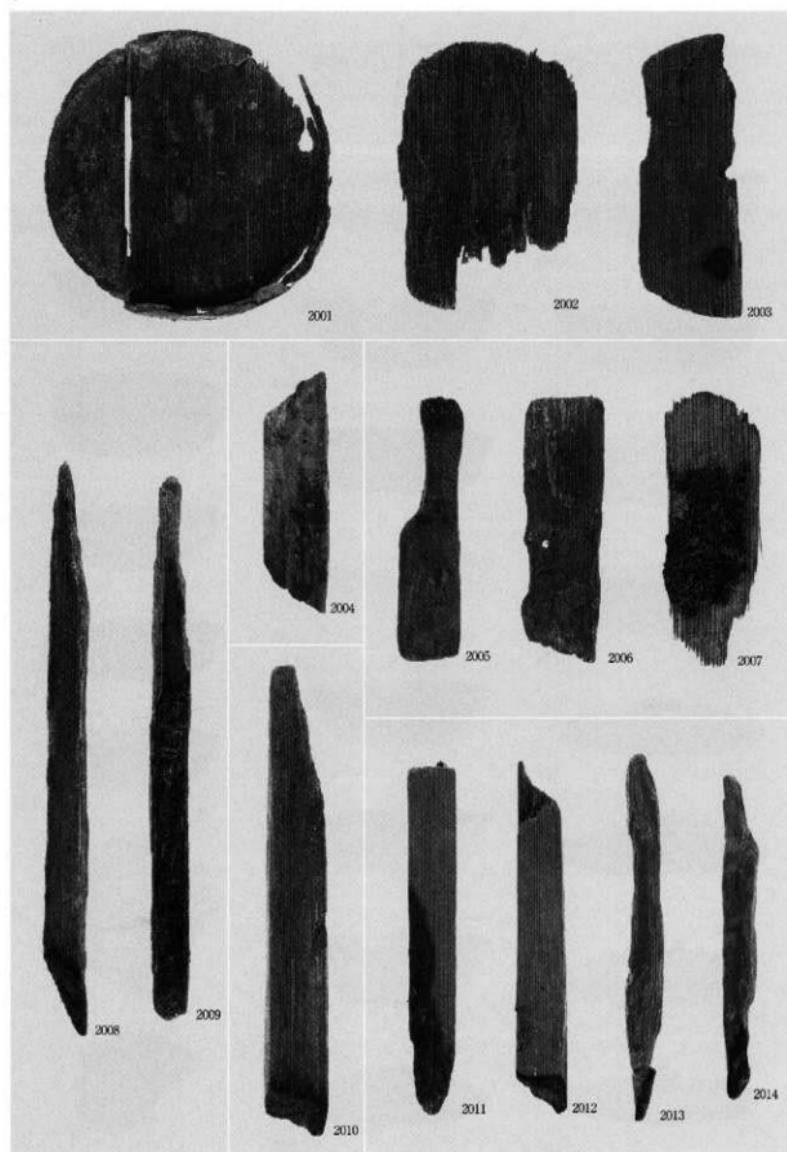
1. 挖立柱建物址 S B01全景（北東）



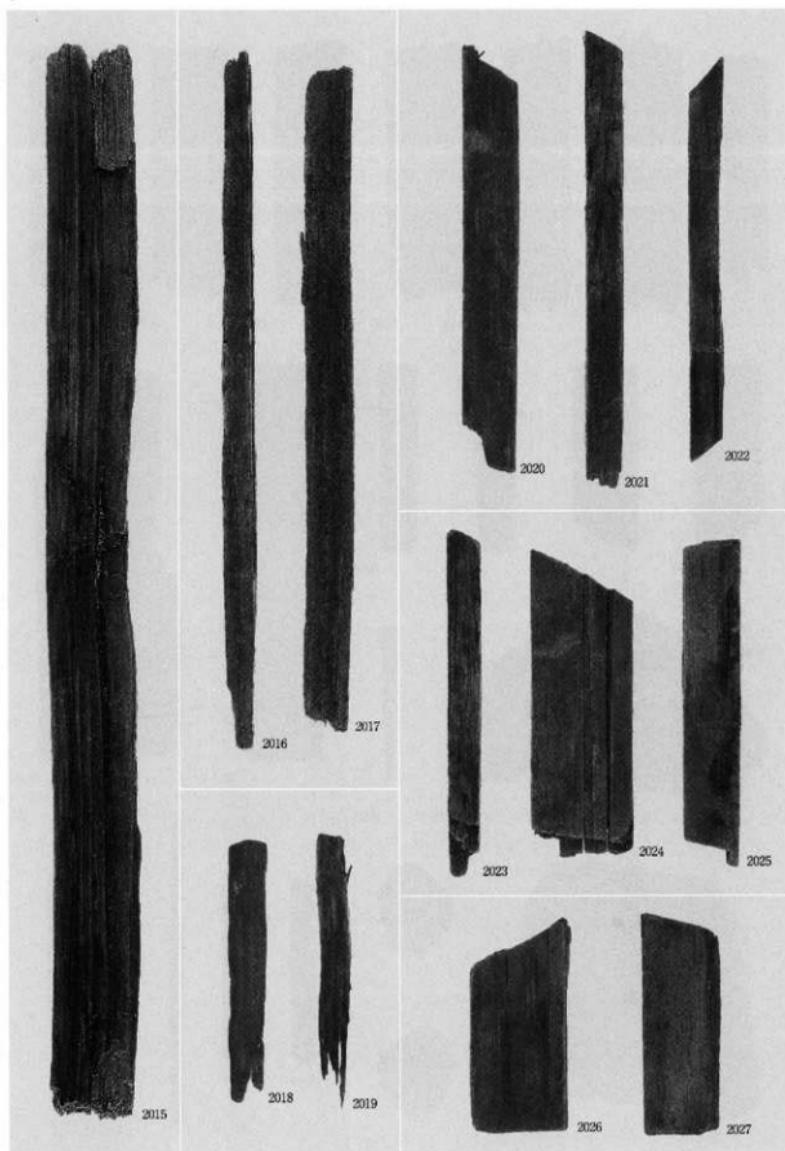
2. 挖立柱建物址 S B01全景（南東）



土器類 須恵器

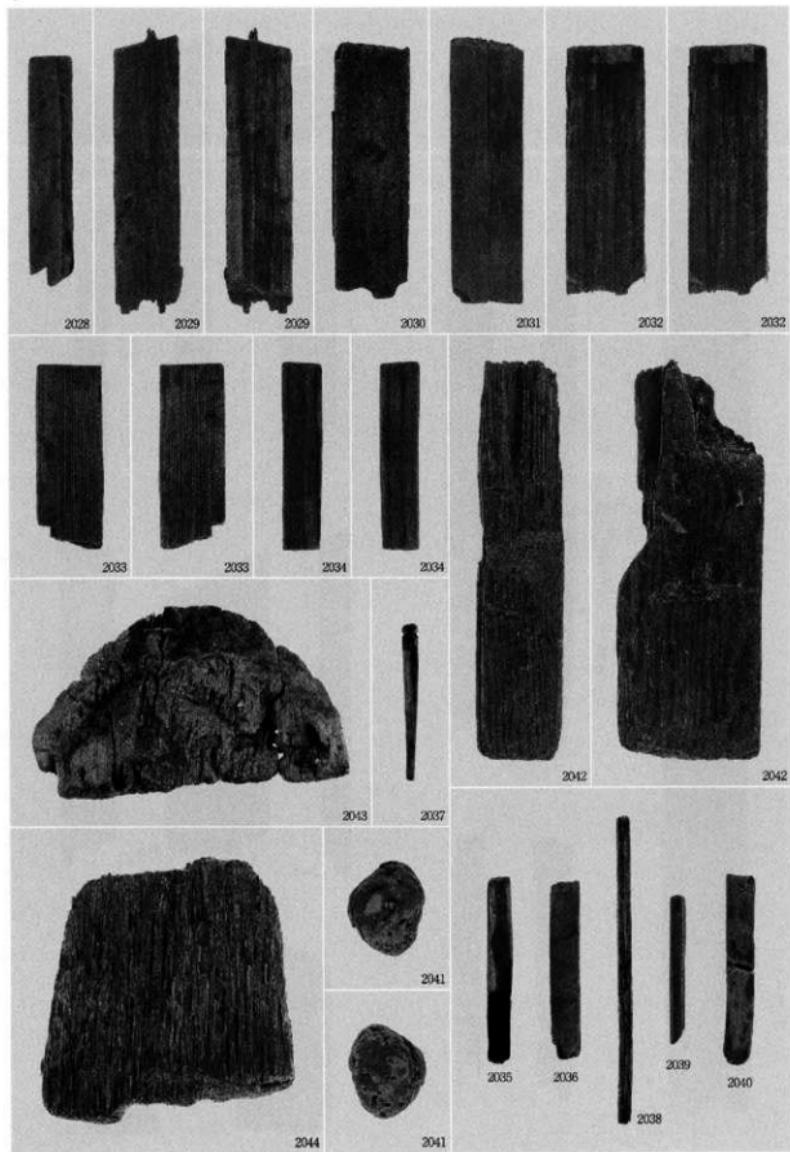


木製品 曲物容器・端部炭化漆状品



木製品 板状素材・板状加工木

圖版一二 遺物寫真



木製品 板状加工木・簪・棒状加工木・直方体原木・柱材・モモ核

高岡市埋蔵文化財調査報告第14冊
東木津遺跡調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市赤小路7番50号

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市穂波48-2

2007年3月15日